

思索の森
(決定版)

はじめに

さて、今回の『思索の森』（「哲学的思考」の実践）というのは、例えば、晩年のソクラテスという人は、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる「広場」（市場）や街頭、その他、もういたるところで、例えば、「勇氣」とは何か、「正義」とは何か、「美」とは何か、「善」とは何か、その他と問いながら、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行ないながらも、結局は、「真知」を得ることは出来なかったということであるが、その歴史上のソクラテスにならって、例えば、「夢」とは何か、「希望」とは何か、「充実感」とは何か、「克己心」とは何か、「理想」とは何か、「情熱」とは何か、その他、そのような「哲学的思索」の一つの「試み」であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和元年七月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

思索の森

- 一、 夢という言葉の定義
- 一、 希望
- 一、 力量
- 一、 われわれは、結局、自分しか語れない。
- 一、 話し言葉と書き言葉の併用
- 一、 アラビア語
- 一、 日本語の表記について
- 一、 充実感
- 一、 克己心
- 一、 孤独
- 一、 ソクラテスの「対話（吟味）活動」
- 一、 孔子とソクラテスの共通点
- 一、 子路
- 一、 理想と現実
- 一、 尊敬
- 一、 韓国ドラマ
- 一、 酒の上での話
- 一、 米中戦争とは何か
- 一、 種族保存欲
- 一、 欲と情
- 一、 よき伴侶（ベターハーフ）
- 一、 情熱
- 一、 成長（脱皮）
- 一、 知性と理性
- 一、 人間の基本的な欲求
- 一、 最後に辿り着く地点
- 一、 死に場所

*

*

夢という言葉の定義

夢という言葉の定義

例えば、「夢」というのは、一体、何かと問えば、それは、一つの「目標」であり、その「目標」は、自分が向かって行きたい「方向」であるとともに、自分が辿り着きたい「地点」でもあるということである。そして、それを可能にしてくれるものは、一体、何かと問えば、それは、結局、本人の「やる気（意欲）」と忍耐とたゆまぬ努力」とにかかっているということである。

また、「夢」というのは、まだそうなっていないということであり、そうなってしまえば、「夢」は「夢」でなくなり、「現実」となり、「現実」となった「夢」は、そのまま「夢」として留まることはできず、「夢」が叶ったその瞬間から、その「夢」は、まさに「自然消滅」するとともに、それに代わって、新たな「夢」が、やがて、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に自ずと生じて来るということである。

それでは、「夢」そのものとは、一体、どういうものかと問えば、それは、次のようなものである。つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）では、いつも実に様々な「思いや考え」などが絶えず現われたり消えたりしている状態であるが、そのような「意識」のなかに、例えば、何かをきっかけとして、「……できれば、自分もああいふふうになりたいなあとか、或いは、自分はこういうふうになりたいなあというようなイメージ」が現われたり、消えたりするようになり、そして、そのような漠然とした「イメージ」が、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）でだんだんと「顕在化」し、そして、「定着化」して来た時に、初めて、その人の最初の漠然とした「イメージ」は、やがて、その人の「夢」としてはつきりとした「形」を取り始めるようになるということである。

それゆえ、「夢」そのもの、というのは、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じて来た、「……できれば、自分もああいふふうになりたいなあとか、或いは、自分はこういうふうになりたいなあ」といった漠然とした「イメージ」そのものであるとともに、その漠然とした「イメージ」そのものが、やがて、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）でだんだんと「顕在化」し、そして、「定着化」して来た時に、初めて、その人の「夢」としてはつきりとした「形」を取り始めるようになるということである。

*

*

いつからか

心がめざす

方向かな

希望

希望

例えば、パンドラの箱を開けて、最後に残ったものは、まさに「希望」であったが、その「希望」さえあれば、われわれは、まだ十分に生きていける。しかし、その「希望」さえも絶たれてしまうと、それは、まさに「絶望」へと堕ちていくしかない。しかし、われわれは、たとえ「絶望」へと堕ちても、いわゆる完全なる「絶望」ということはあり得ない。なぜなら、何らかの「希望」を抱かずに、われわれ人間は、一時たりとも生きてはいられないからである。それは、例えば、今、まさに死んでいくような人でさえ、何らかの「希望」を抱いているものである。それは、なぜなのか？ それは、われわれ生命体は、絶えず生きようとしている。そのように「絶えず生きようとしている生命体」は、たとえいかなる「状況・状態」におかれても、なお「生きようとしている」ものだからである。それゆえ、たとえ「絶望」のどん底にうち沈んでいても、なお最後の「望み」を捨てることはできない。しかし、その最後のかすかな「望み」さえも絶たれてしまうと、最後の最後の最後には、「諦め」という心的状態になるかと思うが、そのような心的状態に落ち込んでも、なお「希望」を捨てることはできない。なぜなら、それが、まさに「生命体の生きようとする本能（遺伝子）の働き」だからである。それゆえ、例えば、「自殺」という行為は、まさに「生命体の生きようとする本能（遺伝子）の働き」に、敢えて「逆らおうとする行為」になるということである。

それでは、「希望」そのものというのは、一体、どういうものになるのかと問えば、それは、次のようなものになるかと思う。つまり、われわれ人間にとって、いわゆる「これがないとも生きられない」というような、まさに最後の最後の「心」の「光」のようなものであるとともに、その最後の最後の「心」の「光」さえも消えてしまえば、われわれ人間は、もう生きられないということである。それゆえ、「希望」そのものというのは、消えるということがないものである。——例えば、『マッチ売りの少女』という作品では、最後、売れず残った「マッチの束」からマッチ棒を一本一本燃やしては、一つは、「暖かな火（ストーブ）」を想像し、一つは、「美味しい料理」を壁越しに想像し、また、一つは、大きくて素敵な「クリスマスツリー」を想像し、その何千のロウソクは、やがて、高く空へとのぼって、その一つが「流れ星」のようになるのを見て、優しかったおばあさんのことを思い出し、そこでまたマッチをこするとそのおばあさんが現れるとともに、最後には、そのおばあさんの胸に抱かれながら天へとのぼっていくという、それは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、その一つ一つが、それこそは、まさにこの「マッチ売りの少女」が心の底から「望んだもの」であり、それは、まさに最後の最後の彼女の「願望」（希望）そのものであったということである。

そして、それをもつと言えば、生きるための最低限の「衣食住」というものは、もちろん、どうしても必要不可欠なものではあるが、それに加えて、いわゆる「暖かな家庭」というものがなければ、小さな子供たちというのは、まさに「生きられない」ということである。つまり、小さな子供たちにとって最も大事なものは、すなわち、何よりも「暖かな家庭」というものであり、その「暖かな家庭」というものこそは、小さな子供たちが心の底から望んでいる、まさに「希望」そのものなのである。

例えば、有名な『フランダーズの犬』というテレビのアニメなども、その内容を辿れば、

やはり、やさしい「おじいちゃん」が生きている間は、幸せであったが、そのおじいちゃん
んが亡くなり、いわゆる「暖かな家庭」というものが崩壊したあとは、少年ネロと一匹
の犬（パトラッシュ）は、それでも一生懸命に生きようとするけれども、結局は、「生き
られなかった」ということである。――それは、小さな子供から少年少女（つまり「子供
たち」）が生きていく上で、最も大事なものは、すなわち、何よりも「暖かな家庭」と
いうものであり、その「暖かな家庭」というものこそは、小さな子供から少年少女（つ
まり「子供たち」）が安心して生きていける、まさに「希望の光」そのものである、とい
うことである。

*

*

心の底

灯る明りぞ

希望かな

力量

力量について

例えば、最初から最後まで、実にこと細かなチェックポイントがあり、その実にこと細かなチェックポイントが、すべて厳密にクリアされたような作品であれば、それは、それだけ真にすぐれた内容の作品になっていく可能性が高くなるということである。逆に、チェックポイントそのものが、そもそも厳密さを欠くような内容であったり、また、最初から最後まで、その厳密なチェックポイントの数が少なくなればなるほど、それだけ大ざっぱな作品になっていく可能性が高くなるということである。それゆえ、どこまでも厳密かつこと細かなチェックポイントを独自に持ち、しかも、そのどこまでも厳密かつこと細かなチェックポイントを、実際にどこまで自ら厳密にクリアしていきけるかが、まさにその人の「力量」ということになる、ということである。

そして、その人の人間としての総合的な「力量」というものは、まさにその人の人間としての総合的な「内的成長（成熟）度」にほぼ正比例するということである。

*

*

世の中は

己^{おの}が力量でしか

見えぬもの

緻密^みに見るには

緻密^みなる力量を

われわれは、結局、自分以外にも語れない。

われわれは、結局、自分以外にも語れない。

例えば、われわれ人間は、実にいろいろなことを話していても、それは、自分なりの「もの」の見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」を語っているものであり、それゆえ、われわれ人間は、結局、自分以外にも語れないということである。もちろん、われわれは、いろいろな内容のことを話しているわけだが、しかし、それは、その人なりの「もの」の見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」の反映に過ぎないのである。——例えば、百人の人に、「人間にとつて何が一番幸せなことですか？」とたずねた時に、その百人一人ひとりの答えは、それぞれみな「微妙に違った答え」になるかと思うが、それでは、なぜ、一人ひとりの答えが、それぞれ「微妙に違った答え」になるのかと問えば、それこそは、まさにその人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他、遺伝子をも含めたもの」）から自ずと形成された、その人なりの「もの」の見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」の「違い」の反映に過ぎず、それゆえ、われわれは、何を語ろうと、結局は、自分以外にも語れないということである。つまり、われわれは、自分という「媒体」を通さずに、ものを考えるところは、それゆえ、結局は、その人なりの「もの」の見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他（好みや志向）」などを帯びた「内容」になるということである。

*

*

話し言葉と書き言葉の併用

話し言葉と書き言葉の併用について

もちろん、「話し言葉」だけでも、その「思考（思索）活動」をどこまでも深めることは、可能であるとしても、いわゆる「話し言葉」と「書き言葉」との併用こそは、まさにわれわれ人類の「思考（思索）能力」をどこまで飛躍的に高め、深めているとともに、極めて厳密かつ論理的な「思考（思索）活動」なども、どこまでも可能たらしめているものである。つまり、「話し言葉」だけでは、どうしても「厳密さ」に欠けるところがあり、とかく「曖昧」になりやすいものだが、いわゆる「書き言葉」（つまり「文字」）の併用によってこそ、より厳密かつ論理的な「思考（思索）活動」が、どこまでも可能になったということである。それは、一体、なぜかと問えば、それは、まさに順を追って、一字一句、その内容を何度でも納得がいくまで確かめながら、一步一步、その「思考（思索）活動」をどこまでも深めていくことが可能（でき得る）ようになったからである。

つまり、「話し言葉」だけでも、その「思考（思索）活動」を深めていくことは、でき得るとしても、やはり、「書き言葉」（つまり「文字」）を併用することによってこそ、なお一層、その「思考（思索）活動」をどこまでも深めていくことが、可能になったということである。——なぜなら、「ものを書く」という行為は、そのまま「書きながらものを考え深める」という行為に他ならず、それゆえ、ただ単に「頭の中」（或いは「心の中」）だけであれこれ考えていた時には、とうてい思いもつかなかったようなことが、ものを書き進めていくという行為によって、初めて、引き出されて来ることが、非常に多いということである。なぜなら、「書きながらものを考える」ということは、一つ一つの考えを一字一句確かめながら、前に進んでいくものであり、それゆえ、ここまでは分かったということになって、その続きの考えを、さらにどんどん深めていくことが可能になるからである。

ところが、「頭の中」（或いは「心の中」）だけでものを考えている時には、どうしても少し前に考えたことを忘れてしまい、「あれ、なんだっけ！」などと思い出しているうちに、今度は、「今まで考えていたこと」を忘れてしまうという、そういう同じようなところで足踏みしたり、また、から回りなどをして、なかなか前に進めないことも、よくあることではないかと思う。一方、書きながらものを考える場合には、そういうことはなく、一字一句、ここまでは分かったという確認を取りながら、考えを前に進めていくものである。それゆえ、確実に、一步一步、今まで考えたことを忘れることなく、安心して、その次へと考えをさらに深めていくことが可能になり、その結果、時には、自分でもびっくりするような「考えや想い」などが引き出されて来ること、非常に多くあるということである。それゆえ、「話し言葉」と「書き言葉」との併用こそは、われわれ人類の「思考（思索）能力」を、これほどまでに飛躍的に高め、深めている、最大の要因の一つになるということである。また、「考えたこと」を何かに書き留めておけば、「頭の中」（或いは「心の中」）だけのように忘れることはないとともに、今度は、そこから考えればよいということ、むだな「思考」（つまり重複）を省くことも、でき得るという利点もあるということである。

*

*

アラビア語

アラビア語について

例えば、われわれ日本人が、初めてアラビア語を見聞きした時に、われわれ日本人は、一体、どのような「心の状態」に置かれるのだろうか？ まず、「話し言葉」から考えてみたいと思うが、例えば、アラビア語で放送されている「ラジオ番組」などを聞いている場合、アラビア語をまったく知らない人たちにとっては、一体、どういう内容の話をしているのか、その意味内容がまったく理解できず、ただただアラビア語の「音」だけがはっきりと聞こえているだけだろう。それでは、それは、いったいどういう状況かと言えば、それは、つまり、その人にとっては、いわゆる「意味や価値」がまったく消えている状態であり、そして、「意味や価値」が完全に消えている状態であればこそ、逆に、アラビア語の「音」そのものが、まさに100%純粋な形で聞こえている状態である。つまり、その人は、話されている意味内容がまったく分からないがために、逆に、アラビア語の「音」そのものが、まさに100%純粋な形で聞こえている状態であり、それゆえ、アラビア語の「音」そのものの「語勢、抑揚、リズム、響き、強弱、その他」の特徴を、そのままそっくり純粋な形で聞くことができるわけである。ところが、われわれ日本人が、日本語を聞く時には、どうしても「意味内容」を自然と理解しながら聞いているために、逆に、日本語の「音」そのものを、まさに100%純粋な形で聞くということができにくくなるわけである。

それは、「書き言葉」（文字）の場合も、まったく同じことであり、例えば、アラビア語で書かれている「新聞」などを見ている場合、そのアラビア語をまったく知らない人たちであれば、そこに書かれている「意味内容」は、まったく理解できず、ただただアラビア語の「文字」だけが、はっきりと見えているだけだろう。それは、つまり、その人にとっては、いわゆる「意味や価値」がまったく消えている状態であり、そして、「意味や価値」が完全に消えている状態であればこそ、逆に、アラビア語の「文字」そのものが、まさに100%純粋な形で見えている状態である。それゆえ、そのアラビア語の「文字」そのものの「姿、形、その他」の特徴を、そのままそっくり純粋な形で見ることができなければならない。逆に、われわれ日本人が、日本語の「文字」を見た場合には、どうしても「意味内容」を優先的に理解しながら見ているために、日本語の「文字」そのものの「姿・形」を、まさに100%純粋な形で見ることができにくくなるわけである。

それでは、アラビア語でも、日本語でも、その他、何であれ、その「文字」そのものの「姿・形」が、まさに100%純粋な形で観て取れることによって、いったいどんな益があるというのだろうか？ それは、その「文字」が、まさに生まれ出でしその「源泉」そのものが見えて来るということである。例えば、「山」という文字は、「山」の形から、また、「井」という文字は、「井戸」の形から、それぞれ創り出されて来たことは、よく知られているが、そのことに初めて気づいた人は、その「文字」そのものの「姿・形」をぼんやりとながめているうちに、「あつ、そうか！」という感じで、気づくことができたのではないかと思う。また、日本語（大和言葉）で、なぜ、月の初めの日を「一日」と呼ぶかと言え、元々、「月立ち」の音変化から「朔日」（一日）となり、それは、まさに「月立つ日」（月が始まる日）という意味であり、それは、月の初めは、旧暦では、月が見えない「新月」から始まるのである。つまり、「一日」という「語音」（その「大和言葉」）が生まれたのは、旧暦において、まさに「月立つ日」（それは「新月の日」という意味で

あり、旧暦では、月の初めの「一日」の日とは、文字通り、まさに「月が見えない状態」（つまり「新月の日」）から始まり、二日月、三日月、上弦の月（右半分）、満月、下弦の月（左半分）、二十日月、その他の「月の形」へと変化し、そして、再び、「新月」（月が見えない状態）へと戻るのである。

そのように、話し言葉の「音」そのものが、まさに100%純粋な形で観て取れることによつて、また、書き言葉の「文字」そのものが、まさに100%純粋な形で観て取れることによつてこそ、その「話し言葉」や「書き言葉（文字）」が、まさに生まれ出でしその「源泉」そのものが見えて来るとともに、その「話し言葉」や「書き言葉（文字）」を創り出した人たちの「心（内面）」をも見えて来るとのことである。しかも、このような見方は、未だ解明されていない「文字」などを解明する時をはじめ、世界中の実に様々な「謎」を解明する時にも、あるいは様々な対象から「新たな美しさ」（つまり「美」）を見い出す時にも、非常に役立つ見方であるということである。

ちなみに、大和言葉の「目」というのは、まさに草木の「芽」から生じたものであり、また、「耳」は、まさに草木の「実」から生じたものである。また、「鼻」は、まさに草花の「花」から生まれ、そして、われわれの人間の「体」は、まさに「殻」から生じたものである。さらに、言葉を「話す」というのは、まさに言葉を口から外へと「放つ」から生れたものである。——すなわち、われわれ日本人の「大和言葉」の、その「最大特徴」は、まさに「自然と一体化している言葉」であるということである。

*

*

日本語の表記

例えば、谷崎潤一郎の有名な『鍵』^{かぎ}という作品は、夫の「日記」と妻の「日記」だけから構成されている作品であるとともに、夫の「日記」は、「漢字+カタカナ」という表記でなされ、一方、妻の「日記」は、「漢字+ひらがな」の表記になっている。それは、一体、なぜなのかと問えば、まず、「漢字+カタカナ」の表記というのは、どちらかと言えば、まさに「男性の表記」であるとともに、昔の「公文書」というのは、すべて「漢文」か「漢字+カタカナ」の表記でなされていたのである。一方、「ひらがな」による表記というものは、どちらかと言えば、まさに「女性の表記」であり、平安時代、「ひらがな」は、「女文字」（おんな手^で）と呼ばれ、女性たちの「日記」は、すべて「ひらがみ」で表記されていたのである。一方、「漢字」というのは、まさに「男文字」（おとこ手^で）と呼ばれ、男の「日記」は、すべて「漢文」か「漢字+カタカナ」で表記されていたのである。

例えば、有名な紀貫之の『土佐日記』の冒頭では、「……男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」となっている。これは、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、紀貫之という人は、当然のことながら、男性であるので、日記は、ふつうであれば、「漢文」か「漢字+カタカナ」で表記されるものである。ところが、紀貫之という人は、「漢字」を使つての表記ではなく、むしろ「ひらがな」を使つての表記で書いてみたくなったのであり、それは、われわれ日本人の微妙な様々な「感情表現」などは、「漢文」や「漢字+カタカナ」の表記では、なかなか思う存分に表現でき得ないからであり、そして、われわれ日本人の微妙かつ繊細な「感情表現」などを思う存分に表現し得た作品の一つが、まさに紫式部の『源氏物語』であると言つてもよいのだろう。それには、次のような「歴史の推移」があるのである。

まず、われわれ日本においては、長く「文字」のない「口承時代」^{こうじょう}がつづき、やがて、中国大陸や朝鮮半島の「文化」とともに、いわゆる「文字（漢字）」が入つて来たわけである。そして、その中国や朝鮮半島の「文字（漢字）」を使つて、いわゆる話し言葉である「大和言葉」を、「漢字」で表記するようになるのである。また、奈良時代には、中国の「漢文」や「漢詩」などを真似て、盛んに「漢文」や「漢詩」などを作つてみたり、また、例えば、『古事記』や『日本書紀』なども、すべて「漢文」（漢字だけ）で表記され、また、有名な『万葉集』なども、いわゆる「漢字一字が一つの音」を表す、まさに「万葉がな」で表記されていて、それゆえ、見た目は、すべて「漢字」だらけで表記されていたのである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、未だわが国には「ひらがな」というものが存在していなかったからである。

* * *

それでは、「ひらがな」や「カタカナ」は、一体、いつどのようにして誕生してきたのかと問えば、それは、次のような推移からである。——まず、「カタカナ」であるが、この「カタカナ」の「起源」というのは、九世紀初めの奈良の「古宗派」の学僧たちの間で漢文を「和読する」ために生じて来たものであるが、「カタカナ」というのは、まさに「生まれるべくして生まれて来た」ものであり、というのも、当時の知識人（教養人）たちと言えば、それは、まさに「僧侶たち」であるが、その「僧侶」たちやその他の教養人たちは、「漢文」というものをそのまま、「中国語読み」（音読み）していたというよりは、む

しる「漢文」というものをまさに「日本語読み」（漢文訓読）をしていたのである。

その場合、「漢字」だらけの「漢文」（それを「白文」と呼ぶ）に、例えば、「レ点」や「一二三点」或いは「上中下点」などの、いわゆる「返り点」を漢字の「左下」に小さく付けたり、また、「ハ、ヲ、ニ、ト、その他」などの「カタカナ」を漢字の「右下」に小さく添えて、「漢字」だらけの「漢文」（つまり「白文」）を、より読み易くしていたのである。そして、そのような「漢文」を、いわゆる「日本語読み」の「文章」に書き下す場合には、いわゆる「漢字仮名交り文」という形式で表記することになるが、その場合、一つには、「漢字+カタカナ」という形で表記する場合と、もう一つは、「漢字+ひらがな」という形で表記する、いわゆる「書き下し文」とがあるということである。

そして、「公文書」は、すべて「漢文」か「漢字+カタカナ」で表記され、一方、文学や一般には「漢字+ひらがな」で表記されるようになるのである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、結局、「漢文」の方が「優れたもの」と考えられていたとともに、一方、「漢字+ひらがな」というのは、われわれ日本人の「話し言葉」である「大和言葉」に「より近い表記」であり、それゆえ、「公文書」（正式の文章）は、「漢文」か「漢字+カタカナ」で表記され、そして、文学や一般には「漢字+ひらがな」で表記されるようになるのである。——それでは、その「カタカナ」の具体的な「生み出し方」は、一体、どのようなものであったのかと問えば、それは、例えば、「阿」から「ア」を生み出し、「伊」から「イ」を生み出し、「宇」から「ウ」を生み出し、「江」から「エ」を生み出し、そして、「於」から「オ」を生み出す、というように、主に「編や旁或いは冠」などから「生み出された」ものであるが、「カタカナ」というのは、本来、「漢文」を「和読する」ために生じて来た「文字」であるとともに、「漢文」を「日本語読み」の「漢字仮名交り文」にする時に使用された「文字」でもあり、その「方法」は、漢字の「右下」に小さく書き添えた「カタカナ」をより大きな「カタカナ」にして「表記」したということである。

*

*

一方、「ひらがな」というのは、平安時代の初期に生み出されるが、それは、まず、「漢字一字が一つの音」を表す、いわゆる「万葉がな」（その「漢字」をほとんど簡略化したものであるが、その「ひらがな」の具体的な「生み出し方」としては、例えば、「安」から「あ」を生み出し、「似」から「い」を生み出し、「宇」から「う」を生み出し、「衣」から「え」を生み出し、そして、「於」から「お」を生み出すというように、まさに「文字の簡略化」から生み出されたものである。それでは、一体、誰が何のためにそのようなものを生み出したのかと問えば、それは、まず、その当時の僧侶や役人たち或いはその他の教養人たち（男性）は、すべて「漢文」か「漢字+カタカナ」という表記を使用していたが、一方、和歌を詠む歌人や物語やその他などを書く人たち（男性も女性）も、むしろ「漢字+ひらがな」という表記を使用するようになるが、それは、われわれ日本人の「話し言葉」である「大和言葉」に「より近い表記」であるからである。

つまり、なぜ、「ひらがな」が生み出されたかと問えば、一つは、いちいち漢字を書くのが面倒なので、その「簡略化」のためであり、それは、まさに「楷書↓行書↓草書↓極端な草体化（平仮名）」であり、一つは、われわれ日本人の微妙な様々な「感情表現」などは、「漢文」や「漢字+カタカナ」の表記では、なかなか思う存分に表現でき得ないからであり、そして、もう一つは、「漢字」だらけの表記では、まさに「漢語」（中国語）

であって、それは「漢民族」（中国人）の言語表記に過ぎない。わが国にはわが国の「話し言葉」である「大和言葉」に見合った「書き言葉」（文字）があつて然るべきであり、それは、まさにわれわれ日本人としての「アイデンティティ」の問題でもあり、八九四年の「遣唐使廃止」以降、やがて、日本独自の「国風文化」が栄えるようになるとともに、公文書は、戦前まで、「漢文」か「漢字+カタカナ」で表記されたが、一方、文学や一般では、まさに「漢字+ひらがな」という「文体」で、話し言葉である「大和言葉」が表記されるようになるとともに、中国の「漢詩」に対抗した、日本独自の「和歌」が確立することにもなるのである。それこれは、まさに延喜五年（九〇五年）に完成した、余りにも有名な『古今和歌集』であり、その形式が、いわゆる「五・七・五・七・七」という形式になったのも、それこそは、まさにわれわれ日本人の「話し言葉」（大和言葉）の特性に最も叶った「形式」でもあつたからであろう。

*

*

充实感

充実感について

例えば、われわれ人間というのは、たとえそれが何であれ、ある「目標」（或いは「ある夢」）などに向かつて、一生懸命に努力しているような時こそは、その人にとつては、まさに最も「充実」している時を過ごしている時であるとともに、その人がめざしている「ある目標」なり「ある夢」などが達成された時には、さらに大きな「満足感」や「達成感」などが得られることになるということである。

そして、われわれ人間がこの世で味わえる、これこそ最大の「充実感」（或いは最大の「満足感」や「達成感」というようなものは、一体、何かと問えば、それは、まさに「自己による自己創造」であり、それは、心身ともに、自分自身をまさに「理想の自分」（つまり、容姿・容貌をはじめ、勉強、運動能力、仕事、様々な諸能力、趣味、生活、遊び、その他、どういうことであれ、自分自身、こうなりたい、あるいはこうでありたいという自分）へと成長させていくことであり、そして、その時々々の「何らかの目標」（或いは「何らかの夢」）などに向かつて、一生懸命に努力しているような時こそは、その人にとつては、まさに最も「充実」している時を過ごしている時であるとともに、その時々々の「何らかの目標」なり「何らかの夢」などが達成された時には、さらに大きな「満足感」や「達成感」などを得るといふようなことを、長い人生のなかで、何度も何度も繰り返しながら、そして、そのようなことの最究極地点としての「到達点」こそは、まさに「自己完成」ということになるということである。

むろん、それが何であれ、いつもいつも行なっていることがうまく行くというようなこととは決してあり得ず、実に様々な「失敗や挫折、その他」などを何度となく経験することになるかと思うが、しかし、何らかの「目標」（或いは「何らかの夢」）などに向かつて、一生懸命に努力しているような時こそ、間違いなく、その人にとつては、まさに最も「充実」している時を過ごしているとともに、たとえそのことに「失敗や挫折、その他」などをしたとしても、そこに降り注がれた努力は、何一つ無駄なことではなく、次の何か「新しい目標」（或いは「何か新しい夢」）などに向かつていく時の、まさに貴重な「経験や栄養分」となっていくものである。しかも、ある「目標」（或いは「ある夢」）などに向かつて、何年も一生懸命に努力した結果として、たとえ挫折したとしても、その挫折こそが、実は、より自分に合った、次の何か「新しい目標」（或いは「何か新しい夢」）へと向かわせる、まさに「原動力」になって行くものであり、それは、自分でもびつくりするような、まったく「新しい世界」が突如として開けることにもなるということである。

それゆえ、大事なことは、何らかの「目標」（或いは「何らかの夢」）などに向かつて、一生懸命に努力し続けることであり、そのような努力の積み重ねこそは、その人の人間としての「内的成長（成熟）」を真に促進させることになるとともに、やがては、その人が望むような方向へと、必ず、道は開けていくということである。

*

*

充実とは

自分が自分と

なることか

克己心

克己心について

例えば、「克己心」というのは、自分の「意志」によって、まさに自分をコントロールすることではあるが、それでは、自分の「意志」で、自分のいったい「何をコントロールする」というのだろうか？

それは、例えば、われわれ人間は、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている存在であるが、そのような実には様々な「欲望や感情」などを自分なりにコントロールして、自分を見失わないようにすることであり、そのようなことができている状態こそは、まさに「節制」や「克己」などができている状態と呼ぶということである。——また、われわれ人間というのは、言うまでもなく、限りなく「弱い」存在であるが、しかし、だからと言って、その「弱さ」にどっぷりと身を任せてしまえば、ますます「弱々しい」存在になってしまうだろう。それゆえ、どこかで歯止めをかけなければならず、どこで「歯止め」をかけるかが、まさにその人の「強さ」ということになるのだろう。

また、誰の「心の中」にも「恐怖心」は、生じて来るものであるが、それは、本来、「自己防衛的な働き」（つまり「本能的な働き」）であり、そして、その「恐怖心」を何とか克服して、何らかの「行動」（言動）を行なうためには、どうしても「勇氣」というものが必要不可欠であり、それは、その人の「心の中」に生じてきた「恐怖心」と闘って、何とかそれを克服しようとする「心の働き」であり、それは、極めて「意志的なもの」になるということである。つまり、「恐怖心」というのは、より「本能的なもの」であるのに対して、一方、「勇氣」というのは、より「意志的なもの」になるということである。

つまり、「怖い」という感情を克服していく過程においては、必ず「勇氣」というものが必要不可欠であり、「怖い」と思っていたものでも、「勇氣」を持ってそれを克服してしまえば、もう「怖い」という感情は、消えてしまうような場合もあれば、逆に、何としてもそれに対する「恐怖心」が、克服できない場合とがあるということである。そして、「恐怖心」と「勇氣」との関係は、その人の「心の中」でお互い「せめぎ合い」を行なっている状態であり、そのような時には、その人が行なおうとしている「行動」（言動）のためらいが生じている状態であるが、やがて、「勇氣」が「恐怖心」にうち勝てば、その人が行なおうとしていた「行動」（言動）を実際に行なうことになるだろうし、逆に、「勇氣」より「恐怖心」の方がより強まれば、その人が行なおうとしていた「行動」（言動）を思い留まることになるのだろう。そして、「恐怖心」と「勇氣」とがほぼ拮抗している場合には、いつまで経っても、決断がつかない状態が続くということである。

それに加えて、われわれ人間の「心の中」に生じて来る様々な「怠惰な心」や「無責任な心」、それに「自堕落な心」、その他などを自分なりにコントロールすることが、すなわち、「克己心」であり、そして、「……己れにうち勝つものこそは、真の勝者である」というのが、まさに釈迦の「言葉」でもあるということである。

* * *

己れに

うち勝つものこそ

真の勝者かな

孤独

孤独について

例えば、われわれ人間は、一方では、人との「関わり」を強く望みながらも、もう一方では、なぜか「孤独」になりたいという欲求もあるということである。

それでは、なぜ「孤独」になりたいと思うのかと言えば、その一つは、いわゆる「人間関係」のなかで、いろいろ「煩わしいことやいやなこと」などがあつた時に、そのようなことから一時的にのがれたいという思いと、もう一つは、誰にも邪魔されない「自分だけの時間」を持ちたいという思いからということになるのだろう。

そして、前者は、どちらかと言えば、本能的（自己防衛的）な「孤独」であり、それゆえ、それは、いわば消極的な「孤独」になりやすいのに対して、もう一方は、どちらかと言えば、意志的（意欲的）な「孤独」であり、それゆえ、それは、いわば積極的な「孤独」になり易いとともに、後者からは、何かが生まれて来る可能性があるということである。

つまり、「人」（或いは「俗世間」と関わっている時には、誰でも百分自分自身になるということは決してでき得ず、どうしても「相手」（或いは「世間」を意識した「心の状態」になってしまふとともに、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然とした「心の状態」にもなつてしまふものである。それゆえ、そのような雑然とした「心の状態」から、もつと本来の「自分自身」になるためには、いわゆる「人間」（或いは「俗世間」との関わりからしばし離れることによって、つまり、「孤独」になることによってこそ、まさに本来の「自分自身」になることができ得るということである。

例えば、われわれ人間の「魂」というのは、プラトン風に言えば、いわゆる「欲望的部分」と「気概（激情）的部分」それに「理知的部分」から成り立っているものであるが、その場合、その人が「気概（激情）的部分」に全面的に支配されて、何らかの「スポーツのトレーニング」などを孤独黙々と継続して徹底的にやり続けければ、その人の「身体や技術」などを飛躍的に「向上・上達」させることも可能になるということである。

一方、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている、ふだんの雑然とした「自我」から離れて、つまり、「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」などの支配から離れて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されることによってこそ、ふだんの雑然とした「自我」から、百分自分自身になりきれている本来の「自分自身」（つまり「純粹自己」）になることができ得るとともに、百分自分自身になりきれている本来の「自分自身」（つまり「純粹自己」）となつて、何か「思惟活動」や「創作活動」などにどこまでも深く溶け込んでいるような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは生じやすくなり、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密に探究でき得るようになるとともに、時には、何か人類的な「発明、発見、創造、業績、行動、その他」などが生み出されることにもなるということである。

そして、「孤独」そのもの、というのは、この世のありとあらゆるものが消えて、百分本来の「自分自身」（つまり「純粹自己」）になつていくということであるが、それは、例えば、「瞑想」の時のように、自分の「目」を閉じれば、いわゆる「外界」（「現実界」）は、消えることになり、今度は、逆に、「心の眼」が開けて、いわゆる「内界」（つまり「思惟界」）が開けることになるかと思う。そして、その「思惟界」で孤独深く物想いに耽入ることによって、やがて、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）には、人間や様

々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などが観えてきて、それらを孤独深く観照しているような「心の状態」にもなるかと思う。しかも、それらは、どれもこれもみな美しいものであり、また、美しいと感じられるものであり、それゆえ、もう目も眩むほどの「美的世界」に深く魅入られている「心的状態」であるとともに、それは、まさに百分自足している「心の状態」でもあるということである。——つまり、外に向いていた「目」を、内に深く向けては、いわゆる「自問自答」の世界へと深く溶け入り、「自己観想」とともに、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを孤独深く観照しながら、まさに「百分自足している心の状態」でもあるということであり、それが、すなわち、「孤独」そのものである。——そして、そのような「心の状態」こそは、まさに釈迦の「瞑想の姿」そのものでもあるのである。

*

*

ソクラテスの「対話（吟味）活動」

ソクラテスの「対話（吟味）活動」について

例えば、ソクラテスは、政治家をはじめ、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ手
工者、その他、実にいろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうよ
うになるが、ソクラテスは、それを「ヘラクレスの難行」のようなものだったと回想して
いるわけである。その結果として、「……かれら（政治家や作家）は、けっこうなことを
いろいろとたくさん口では言うけれども……」、「……おそらく善美のことがらはなにも
知らないらしい」という結論になったということである。それでは、その「善美のことが
ら」とは、一体、どういうものかと問えば、それは、正義とは何か、勇気とは何か、美と
は何か、善とは何か、その他、そのようなものであるということである。

つまり、ソクラテスは、いろいろな分野の人たちと、例えば、正義とは何か、勇気とは
何か、あるいは人間にとって何が大事であるか、その他、そのような題目で、いろいろと
「対話（吟味）活動」を徹底的に行なってみたら、それに厳密に「答えられる」人間は、
誰もいなかったということである。——それは、ソクラテスにしてみれば、「正義とは何
か」を厳密に知らないとすれば、その人は、正義でもないことを何か正義だと思いついて、
逆に不正なことを行なったり、また、「勇気とは何か」を厳密に知らないとすれば、その
人は、勇気でもないことを何か勇気だと思いついて、かえって無謀で愚かなことを行なっ
てしまうということである。また、もし「人間にとって何が大事であるか」を厳密に知ら
ないとすれば、その人は、大事でもないことを何か大事なことだと思いついて、かえって
取るに足らないような「行動」（言動）を行なってしまうということである。

つまり、真に物事を厳密に判断でき得る「思考（思索）能力」がなければ、その人は、
物事を正しく判断することも、また、正しく行動することもでき得ず、どうしても「間違
った考えや判断、或いは価値観や人生観、その他」などを持つて、実に様々な「行動」（言
動）などを行なうことになるが、その結果として、自分に対しても、また、他人に対して
も、あるいは社会や国家などに対しても、実に様々な「禍」（わざわい不幸）をもたらしている最
大の「原因」（要因）でもあると考えているのである。——つまり、大事なのは、あれこ
れの単なる専門的な「知識や技術」などではなく、むしろ「何が正義であり、何が勇気で
あり、そして、何が人間にとって大事なことであるか」を厳密に判断でき得る、そういう
厳密な「思考（思索）能力」こそは、最も大事なものであり、それによってこそ、まさに
「よりよい成果」（或いは「より悔いのない結果」）が、真に得られるようになるという
ことである。そして、その人が行なう、そのような厳密な「思考（思索）能力」こそは、
その人のあらゆる「行動」（言動）の大元（源泉）となっていくものであり、それゆえ、
そのような厳密な「思考（思索）能力」を真に鍛え、育て上げることこそは、何よりも大
事なことになるとともに、そのための「方法」として、例えば、ソクラテスが実際に行な
っていた、いわゆる「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）なども、その一つの
「方法」として、存在するということである。

*

*

孔子とソクラテスの共通点

孔子とソクラテスの共通点

例えば、『論語』のなかで、孔子は、「……吾知ることあらんや、知ることなきなり。雖夫（田舎の無知な人）あり、来たりて我に問う。空空如たり（まじめな態度なり）。我その両端を叩いて竭くす」という有名な言葉があるが、これなどは、ソクラテスが、「……自分は何も知らない、ただ相手の問いや答えに対して、それは、こういうことではないかと、自分も一諸になって、いろいろな角度から徹底的に考えたり、また、徹底的に吟味を尽くすだけである」という立場と、全く同じものであり、それこそは、まさにソクラテスの「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）の原点そのものである。

また、孔子の「……知れるを知るとなし、知らざるを知らずとなす」というこの言葉は、そのままソクラテスの「自分は知らないから、知らないと思う」という、あの有名な「無知の知」（つまり「無知の自覚」）と基本的にはまったく一つに重なり合うものである。——つまり、孔子も、ソクラテスも、最初から、いわゆる「世の物知りたち」というものを全く問題にしていなかった。なぜなら、「世の物知りたち」は、自分は、もうそのことについてはすでによく知っていると思ひ込んでいるために、あるいは人や書物などから得た他人の「知識」などをそのまま受け入れて、すでに知っているつもりになっているために、そのことについてあらためてあらゆる角度から徹底的に「考え直してみる」という、つまり、「問いと疑問」とを無限に積み重ねては、どこまでも徹底的に「自ら考え深めていく」という、最も大事な「思考（思索）活動」そのものが、まったく欠落している、或いは、不十分であると考えていたからである。

また、孔子には、「……吾が道は、一以てこれを貫く」という有名な言葉があるが、むしろ、それにもいろいろな解釈が得られるだろうが、例えば、上述のような「態度」を、「一以てこれを貫く」というように言えなくもないし、また、『論語』のなかの曾子は、それに対して、「夫子の道は、忠恕のみ」（つまり「先生の道は、忠恕（真心と思ひやり）に他ならない」と答えている。そこで、仮に、ここではその解釈に素直に従ってみるならば、その「忠恕」（つまり見せかけではない本当の「真心と思ひやり」）の出どころ「源泉」は、一体、どこにあるのかということになるかと思うが、それこそは、まさに孔子という人間の「魂」の最も奥深いところで生き生きと躍動していたであろう、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からということになるのだろう。

つまり、われわれ人間というのは、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされていくわけだが、一方、そのような「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」などの支配から解放されて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されているような人（例えば、孔子のような人）であれば、その人の思惟主体である「知性＋理性」は、いわゆる「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からの全面的な働き（作用）を受けて、より高い「知性＋理性」となり、そのより高い「知性＋理性」となった「理知的部分」が行なう本格的な「思考（思索）活動」によってこそ、弟子をはじめ、いろいろな分野の人たちとの「対話（議論）」などに臨んだ時にも、まさに『時に中す』（つまりその時その時に最も的確で「的を射た）数多くの「生きた言葉」（つまり「生命を宿した言葉」）が、生き生きと孔子の「口」からあふれ出てきたということである。それは、真に「内的成長（成熟）」をして、その人のなかで「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）が

生き生きと躍動している人間だけに可能なことであり、それは、ソクラテスの場合にも全く同じことが言えるわけである。——そして、孔子は、「下学かがくして上達す」（つまり、下は、人間社会の諸問題から学びはじめ、やがて、上は、天命を知るまでに至った）人であるが、晩年の孔子は、「……我を知る莫なきかな。（中略）、天をも怨うらまず、人をも咎とがめず、下学かがくして上達す。我を知る者はそれ天か」という心境になっていたということである。

それは、晩年のソクラテスの場合にも、朝早くから遊歩道や体育場、また、広場（市場）や街頭、その他に出かけて行つては、いろいろな人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうことを、いわば毎日の日課のようにしていたわけであるが、それでは、ソクラテスは、一体、何のためにそのような活動をしていたのか、その「真意」をほんとうに理解している人など、恐らく、誰もいなかっただろう。つまり、晩年のソクラテスも、孔子と同じように、「我を知る莫なきかな」（つまり「自分をほんとうに理解している人など誰もいないだろうなあ」と言えたはずであり、また、「我を知る者はそれ天か」とも言えたはずである。——なぜなら、晩年のソクラテスは、アテナイ人の「心の眼」を目覚めさせるために、つまり、多くの人たちの実に様々な「無知」（＝思い違い）などをはつきりと自覚させるために、また、何よりも「魂」を大切にしようにと、毎日のように「対話（吟味）活動」を行なっていたのも、ほんとうのことを言えば、すべて「神からの絶対的な命令」（つまり「天命」）を受けていたからであり、そのような非常にはつきりとした使命感を持つて、死ぬまで積極的に活動をし続けた人だからである。

そして、そのような晩年のソクラテスの心の最も奥深いところにあつたであろう「真意」は、例の「裁判」の時に、（恐らく）、初めて、弟子をはじめ、多くの陪審員たち（アテナイの人たち）の前で、ソクラテス自身の「口」から、はつきりと「明言（吐露）」されることになる。これは、実に驚くべきことであり、われわれ人間は、自分の心の最も奥深いところにある、「思い」（つまり自分の「魂」の核心部分）について、大勢の人の前ではつきりと「明言（吐露）」することは、極めて少ないことであり、それゆえ、若しも「裁判」に訴えられるということがなかったならば、恐らく、ソクラテス自身の「口」から、あれほどはつきりと聴くということは永遠になかったかも知れないのである。それゆえ、プラトンの『ソクラテスの弁明』という作品こそは、もちろん、いろいろと脚色が施されているとしても、歴史上のソクラテスという人間を知る上で、最も大事な文献となり得るものであるとともに、最も美しくかつ最も優れた「珠玉の作品」の一つになるかと思う。なぜなら、その「作品」からは、ソクラテスという人間の「考えや思想」が、まるで「生きた言葉（敢えて肉声）」の如くに生き生きと聞こえてくるからである。

それでは、もう一度、孔子の「吾が道は、一以てこれを貫く」という言葉に戻りたいと思うが、孔子も、ソクラテスも、まさに「一以てこれを貫いて」いた人たちであり、それは、何よりも「真実・真理」（或いは「真善美」）を愛し求めてやまないという真の「愛知者」（或いは「好学者」）であつたということであるとともに、そのように何よりも「真実・真理」（或いは「真善美」）を愛し求めてやまないように根底から絶えずつき動かし続けていたものこそは、まさに「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からであり、それが彼らの「魂」のなかで生き生きと躍動していたということである。そして、彼らは、もう一方の「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」などに身を任せることはあまりなく、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されていたので、彼らの思惟主体である「知性+

理性」というのは、まさに「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からの全面的働き（作用）を受けて、より高い「知性＋理性」となり、そのより高い「知性＋理性」となった「理論的部分」が行なう本格的な「思考（思索）活動」によってこそ、弟子をはじめ、いろいろな分野の人たちとの「対話（議論）」などに臨んだ時にも、まさに『時に中す』（つまりその時その時に最も的確で「的を射た」）数多くの「生きた言葉」（つまり「生命を宿した言葉」）が、生き生きとその人の「口」からあふれ出て来るとともに、彼らの「言動」のほとんどすべては、まさにその「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）から発し、そこから生み出されていたと言ってもよいだろう。それが、恐らく、「吾が道は、一以てこれを貫く」という言葉の真意になるかと思う。

*

*

わが道は

一以て貫く

孔子かな

子路

子路について

例えば、孔子は、子路の「勇」を好む性格をみて、いわゆる「その死を得ざらん」と言うわけだが、それは、一体、どういう意味合いになるのかと言えば、それをプラトン風に解釈すれば、孔子自身は、すでにいわゆる「理知的部分」に全面的に支配されている「心的状態」になっていただろうが、一方、「勇」を好む性格の子路は、むしろ「気概（激情）的部分」に支配されていたことになるかと思う。そこで、孔子は、いわゆる「気概（激情）的部分」に支配されている子路を見て、まさに「その死を得ざらん」と予言することになるわけである。それでは、なぜ「気概（激情）的部分」に支配されていると、どうして「その死を得ざらん」（つまり「ふつうの死に方はできない」ということになるのか？）それは、いわゆる「気概（激情）的部分」に支配されていたのでは、どうしても他人とないかにつけてぶつかり合うことが多くなるとともに、そのぶつかり合った時にも、どうしても自分の方から身を引くということができず、最後まで張り合ってしまうことが多くなり、それだけ危険に身をさらして、その身を滅ぼす可能性が高くなるからである。

もちろん、われわれ人間にとっていわゆる「気概」というものがなければ、いわば腑抜けのようになってしまうので、ある程度は必要不可欠なものではあるが、ただ問題は、その「気概」の有り様なのである。それは、一体、どういう意味合いかと言えば、それは、次のようになるかと思う。つまり、われわれ人間の「魂」をプラトン風に区分するならば、それは、「欲望的部分」と「気概（激情）的部分」それに「理知的部分」に分かれるわけであるが、その場合、若しもその人の「理知的部分」がまだ未熟な状態であれば、当然のことながら、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等を厳密に行なうことはできない。しかも、その人が「気概（激情）的部分」に支配されているような人であれば、例えば、勇気でもないことを何か勇氣だと思ひ込んで、逆に無謀で愚かなことを行なったり、また、正義でもないことを何か正義だと思ひ込んで、かえって不正なことを行なったり、その他、そのような「無知」（つまり「中途半端で間違った判断」等）を持って、安易に「行動」（言動）するからこそ、自分に対しても、また、他人に対しても、あるいは社会や国家などに対しても、実に様々な「禍」（不幸）をもたらすことにもなるわけである。

一方、その人の「理知的部分」がそれなりに成熟している状態であっても、様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまえば、同じように様々な問題をひき起こす可能性が高くなるわけで、それゆえ、大事なことは、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されることであるが、その「理知的部分」に全面的に支配されるためには、どうしても真に「内的成長（成熟）」することが、何よりも必要不可欠になって来るといえることである。なぜなら、真に「内的成長（成熟）」することによってこそ、その人は、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配される「心的状態」になるからである。それでは、真に「内的成長（成熟）」をすれば、もう二度と様々な「欲望や感情」などに振りまわされることはなくなるのかと言えば、もちろん、生身の肉体を持ち合わせている限りは、常に、様々な「欲望や感情」などに振りまわされる可能性があるわけだが、その時には、まさに「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」に支配されている「心的状態」になっているということである。

それでは、真に「内的成長（成熟）」をしようとしまいと全く同じではないかと反論があるかと思うが、ただ、違いがあるとすれば、真に「内的成長（成熟）」することによっ

て、たとえその時は様々な「欲望や感情」などに振りまわされたとしても、やがて元通りの「心の状態」(つまり「理知的部分」に全面的に支配されている心的状態)に戻る事ができ得るということである。——それは、例えば、静かな「湖水の面」に風が吹いたり、鳥が飛び立てば、その静かな「湖水の面」には大小様々な波紋が広がることになるが、しかし、だからと言って、そのような状態が長く続くというようなことはなく、やがて、静かな「湖水の面」に戻っていくようなものである。そして、そのような「心の状態」になっ
ているということこそは、まさに真に「内的成長(成熟)」を遂げているという証しにもなるわけである。

*

*

理想と現実

理想と現実について

例えば、「現実」というのは、実に様々な「不備や欠陥」などに満ちているものであるが、そのような実に様々な「不備や欠陥」などがすべて解消されて、まさに「完全なる状態」になることが、すなわち、「理想」の状態になるということである。例えば、「現実の自分」というのは、実に様々な「不備や欠陥」などに満ちているものであるが、そのような実に様々な「不備や欠陥」などがすべてクリアーされて、まさに「完全なる状態」になることが、すなわち、「理想の自分」になるということである。

*

*

また、「理想」というのは、まさに考え得る「最究極地点」であり、それゆえ、「現実」にはなかなか到達でき得ない地点であるが、しかし、われわれ人間というのは、その考え得る「最究極地点」である「理想」の地点へと少しでも近づきたいとたゆまぬ努力を続けることになるかと思う。例えば、プロのピアニストであれば、まさに「最初から最後まで、実に厳密かつこと細かなチェックの入った楽譜通りの演奏」をしようとするものであるが、その場合、その「最初から最後まで、実に厳密かつこと細かなチェックの入った楽譜通りの演奏」こそは、まさにその人にとっての「理想」であり、それゆえ、その「最初から最後まで、実に厳密かつこと細かなチェックの入った楽譜通りに演奏」しようとして、実際にピアノを弾きながら演奏した結果が、まさに「現実」の演奏であるとともに、若しもその「最初から最後まで、実に厳密かつこと細かなチェックの入った楽譜通りの演奏」ができ得た時は、そのピアニストにとっては、今日の演奏は、まさに「完璧」（パーフェクト）な演奏であったということにもなるのだろう。

*

*

ところで、プラトンという人は、この世にあるありとあらゆる事物には、すべて最究極的なものとしての「ものそのもの」（つまり「アイデア」）というものが存在するという「大前提」を立てることになるわけである。——それは、例えば、「現実界」には、実にいろいろな「椅子」が存在しているが、しかし、それらは、すべて「不完全なもの」であるし、一方、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「アイデア界」）に存在する「椅子そのもの」こそは、まさに「完全なるもの」であり、それこそは、最究極的な「一なる椅子」であるとともに、まさに「椅子のアイデア」ということにもなるということである。

例えば、「現実界」には、実にいろいろな「パソコン」が存在しているが、しかし、それらは、すべて「不完全なもの」であるし、それゆえ、最究極の「一なるパソコン」というものを愛求して、どこまでも探究し続けるということこそは、まさに「理想のパソコン」をめざすということであり、それは、例えば、クルマ、テレビ、ゲーム、ラーメン、その他、もうすべてのことについて言えることである。つまり、「理想」というのは、まさに「最究極の（一なるもの）」であるとともに、その「最究極の（一なるもの）」というものを愛求して、無限に果てしなくどこまでも探究し続けることは、まさに何か真に優れたものを生み出そうとする人たちのめざす方向であるとともに、まさに「最究極の到達地点」でもあるということである。

そして、その「理想」そのもの、というのは、この「現実界」には存在せず、それは、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「アイデア界」）にこそ存在するものであるとともに、われ

われ人間というのは、その遙か彼方にある、例えば、クルマ、テレビ、パソコン、ゲーム、ラーメン、その他、何であれ、この世にある実に様々な事物の「最究極のへーなるもの」
というものを愛求して、無限に果てしなくどこまでも探究し続けて止まない、永遠の「探
究者」ということにもなるのだろう。

*

*

理想とは

これ以上

望むことなき

状態かな

尊敬

尊敬について

例えば、あなたの尊敬する人物は、誰ですか？ と尋ねられた時に、昔であれば、多くの人たちは、歴史上の人物などを挙げるが多かったかと思うが、最近では、自分の父親や母親などを挙げる人が非常に多くなってきているのではないかと思う。

それでは、いわゆる「尊敬」というのは、一体、どのような意味合いで用いられているのだろうか？ つまり、われわれ人間は、一体、人間の何を「尊敬」と言っているのだろうか？ 例えば、「……身分や家柄、容姿や容貌、人間性や生き方、能力や才能、財産や収入、職種や社会的地位、趣味や所有物、その他」、そのようなもののどれかということになるかと思う。

そして、われわれ人間が、ある人を「尊敬」というのは、できれば、自分も「そのような人になりたい」ということでもあるのだろう。例えば、ある人の「身分や家柄」などを尊敬やうらやましいと思うということは、できれば、自分もそのような「身分や家柄」の人になりたいということであり、また、ある人の「容姿や容貌」などを尊敬やうらやましいと思うということは、できれば、自分もそのような「容姿や容貌」になりたいということであり、そして、ある人の「人間性や生き方」などを尊敬やうらやましいと思うということは、できれば、自分もそのような「人間性や生き方」のできるような人間になりたいということでもあるのだろう。

また、ある人の「能力や才能」などを尊敬やうらやましいと思うということは、できれば、自分もそのような「能力や才能」のある人間になりたいということであり、また、ある人の「財産や収入」などを尊敬やうらやましいと思うということは、できれば、自分もそのような「財産や収入」などを得てみたいということであり、そして、ある人の「職種や社会的地位」などを尊敬やうらやましいと思うということは、できれば、自分もそのような「職種や社会的地位」などに就いてみたいということでもあるのだろう。

そして、われわれ人間が、ある人間を「尊敬する」という場合、われわれは、その人の「身体的部分」（例えば、「容姿・容貌」をはじめ、鍛え抜かれた「身体や運動能力」、その他）の真に優れていることを「尊敬」とするということもあれば、もちろん、いわゆる「その人の生き方や考え方、また、その人の能力や才能、さらに、努力する姿や逆境などに負けない精神、或いは積極的な活動や挑戦し続ける姿、その他」などを、いわば「尊敬」しているという場合もあり、それは、その人の「精神的部分」を、まさに「尊敬」しているということになるのだろう。もちろん、その両方を「尊敬」しているという場合も、当然のことながら、あるということである。

つまり、われわれが、ある人間を「尊敬する」という場合、基本的には、その人の人間として「優れている部分」を「尊敬する」ということであり、それゆえ、「尊敬」というのは、一つは、その人の人間として「優れている部分」に対する高い「評価」の表れであり、そして、もう一つは、できれば、自分も「その人」のようにになりたいという「憧れ」の対象でもあるということである。

それに加えて、もう一つは、古今東西の誰であるを問わず、その人のおかげで、自分は、（人間として）成長できたということに対する「感謝」の気持ちの表れでもあるのだろう。それは、例えば、今の自分があるのは、「……親のおかげ、恩師のおかげ、監督やコーチ

のおかげ、親友や仲間のおかげ、また、古今東西の真に優れた人物たちにめぐり逢うこと」
によってこそ、自分は、（人間として）真に成長でき得たということに対する「感謝」の気
持ちの表れでもあるということである。

*

*

敬意とは

人を人として

見ることか

韓国ゼミ

韓国ドラマについて

例えば、われわれは、ふだんテレビを見聞きしている時に、何か「不快に思うような場面や言動など」に出つくわすと、もちろん、そのままその番組を見続ける場合もあるだろうが、一方、ほかに何かやっていないかと、チャンネルを切り換えてしまうような場合も多いかと思う。——つまり、視聴している人たちにとって、いわゆる「面白いものや心惹かれるようなもの」であれば、積極的に見聞きしようとするが、一方、なにか「不快やつまらないなあと思うような場面や言動」などに対しては、むしろ「拒絶反応を示すような傾向」があるという、まさに、そういう「大原則」があるということである。

そのようなことを踏まえて、韓国ドラマを見聞きすると、韓国ドラマというのは、実に「ほどよく抑制が利いた言動になっている」ということである。つまり、視聴者が見聞きしていて、明らかに「不快や嫌悪感を感じるような言動」などは、極力避けられているために、多くの人たちは、ずっと「その画面を見聞きしていられる」ということである。——例えば、ある人たちにとっては、何でもない「言動」でも、ある人たちにとっては、不快に感じるような「言動」があり、何でもない人たちは、そのまま見続けるだろうが、不快に感じているような人たちは、そこで見聞きするのをやめて、ほかの番組へとチャンネルを切り換えてしまうということもあるのだろう。つまり、「韓国のドラマ」の最大の特徴というのは、まさに「役者の言動がほどよく抑制が利いている」ので、誰が見聞きしても、それほど「不快を感じる」ことの少ないような「言動」になっていることである。

そして、もう一つの「極めて大きな要因」は、何かと問えば、それは、何よりも「見た目のよい人たち」が中心のな役を演じているということ。それは、極めて大事なことであり、それこそは、視聴している人たちをまさに「無条件で惹きつける最大の要因」になっているということである。だからこそ、「韓国ドラマ」は、今、世界中で人気を博し、好意的に「受け入れられている」最大の要因になっているのである。つまり、「韓国ドラマ」の最大の特徴は、一つは、まさに「役者の言動がほどよく抑制が利いている」ので、誰が見聞きしてもそれほど「不快を感じる」ことの少ないような「言動」になっているということ。そして、もう一つは、「映画」や「ドラマ」というのは、まさに「表情、芸術」と呼ばれているものであり、役者の「顔の微妙な表現」一つで、その「ドラマ」の善し悪しが決まると言ってもよく、その点から見ても、韓国の中心的な「役者」は、それなりの演技力を持っている、しかも、映像表現も魅力的で美しい。そして、何よりも「見た目のよい人たち」が中心のな役を演じているということ、それこそは、視聴している人たちをまさに「無条件で惹きつける最大の要因」になっているということである。もちろん、できのよいドラマもあれば、そうではないドラマもあるだろうが、できのよいものは、脚本の面白さを初めとして、役者の演技力や相関関係の多重性、或いはドラマの展開の面白さ、その他、いろいろいな要素が、複合的に作用し合って相乗効果を上げているということである。

例えば、ふざけるにも、ふざけすぎない。笑うにしても、笑いすぎない。泣くにしても、泣きすぎない。怒るにしても、極端に怒りすぎない。喜ぶにしても、自然で魅力的な喜び方にする。しらけるにも、しらけすぎない。醜くなるほどの極端な表情は、なるべく避ける。音楽なども魅力的で、より効果的に使っている。地が出て、しらけさせるようなことはしない。あくまでも役に徹している、その他、そのように「ほどよく抑制が利いている

演技（言動）であり、極端にはみ出した演技（言動）などは少ない」ので、見聞きしている人々も、そのままずつと見聞きしていられるということである。

例えば、今は、まさに「自然な演技」が大事とされているが、しかし、その「自然な演技」というのは、何も「演技」をしないということでは決してなく、しっかりと「演技」はしているながらも、それがあまりに「自然なので演技をしているように見えない」というのが、まさに「本来の意味合い」になるかと思う。また、役者は、どうしても「真実味^{リアリティ}」を出そうとして、とかく「過剰な演技」になりやすいが、それは、映画や舞台のような「外で見る」場合であれば、それは、それでもよいが、しかし、いわゆる「テレビドラマ」というのは、ごく日常の「家庭生活」のなかで見ているものであり、それゆえ、あまりにも極端な「演技」は、逆効果であり、必要以上の「過剰な演技」は、むしろ「グロテスク」になってしまい、見る方も、逆に、引いてしまうようなことが多いのだろう。

また、昔の「映画」や「ドラマ」というのは、多くの場合、主人公やヒロインなどに見えるだけ魅力的でカッコいい台詞^{セリフ}などを言わせて、誰もが心惹かれるような理想的な役を演じていたかと思うが、今は、そのような主人公は、一体、どこへ行ってしまったのかと問えば、それは、実は「漫画^{マンガ}やアニメ」の主人公やヒロインとして、華々しく^{はなばな}魅^{よみがえ}つていたのであり、しかも、今や「映画」や「ドラマ」などは、その人気を失い、一方、「漫画^{マンガ}」や「アニメ」こそは、まさにその「全盛期」になっているということである。

ところで、一時期、韓国のドラマの多くは、まず、何々グループの会長が出てきて、その会長の「息子なり娘なり孫なり」が、多くは、主人公かヒロインとなり、そして、例えば、主人公が男性であれば、その相手役の女性は、多くの場合、あまり恵まれていない環境か、ふつうの環境で育ち、その女性が会長の息子（孫）などと「恋愛関係」になっていくという、まさに「シンデレララブストーリー」になっていて、それは、いつか「白馬に乗った王子様が現われて、自分を幸せにしてくれる」という、観ている数多くの女性たちの「夢をドラマで疑似体験させてくれるようなもの」であったということである。

そして、今とはかく、一時期の韓国ドラマは、主人公の男性には、必ず、その主人公に思いを寄せている女性がいて、その女性と相手役の女性との間で「三角関係」になったり、また、主人公の男性には、多くはライバル的な存在がいて、そのライバル的な男性と相手役の女性それに主人公の男性との間で「三角関係」になったりとともに、四人の中心人物、一人は、主人公の男性、一人は、その相手役の女性、一人は、ライバル的な男性、そして、もう一人は、そのライバル的な男性と親しい女性か、主人公の男性に思いを寄せている女性、この「四人の男女のからみ」によってこそ、ドラマが展開していくという「ストーリー」になっているというのが、まさに最も「基本的なパターン」になるかと思う。——もちろん、多種多様な「ドラマ」があり、それゆえ、多種多様な「ドラマ展開」になっているものではあるが、意外に、その「骨組み」は、いわゆる「四人」（或いは三人の男女のからみ）になっている場合が多いということである。もちろん、それに加えて、家族間の「骨肉の争い」などもからんでくるが、ここでは省略したいと思う。

*

*

酒の上での話

酒の上での話

例えば、昔から、酒を飲んでかなり酔った上でのことだから、今回のことは「大目に見てほしい」という言い訳がある。確かに、酒に酔うことによって、その人の「知性や理性」などの働きが弱まることは事実であるが、しかし、大事な要点は、そこにあるのではなく、大事なものは、次のようなことである。

つまり、あるがままの「生身の人間」というのは、自分でも自分がいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からないものである。このことは、徹底的に考えてみる必要がある、われわれは、どうしてもあの人は、ああいう人、自分はこういう人間と考えるやすいものであるが、しかし、そういう固定化した存在では決してなく、むしろいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からない、そういうまさにどろどろとした得体の知れない存在なのである。

例えば、社会的な地位もあり、また、思慮分別もあると思われる人が、何か飛んでもないことをすると、われわれは、一応に驚いたりするが、しかし、その人がどういう職業に就いているからとか、ふだんは、こういう人だからということ、その人間を推し測ることはできないのである。というのも、われわれ生身の人間の「心の中」で蠢いている実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、そのまま外に現われるのではなく、それらは、その人の「知性や理性」などで自然とコントロールされた形で、外に現われて来るものだからである。

それゆえ、外に現われ出た「言動」だけを見て、あの人は、ああいう人と断定するわけにもいかないのである。——つまり、われわれ生身の人間の「心の中」には実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、絶えず現われたり、消えたりしている状態であるが、しかし、それらは、その人の「知性や理性」などで自然とコントロールされている状態であり、それゆえ、もしその人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には、(例えば、酒などをかなり飲んで、その人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には)、実に様々な生々しい「欲望や感情」その他などが、そのまま外に現われやすくなるということである。しかも、それは、ふだんはその人の「心の奥」に押し込められていた「本音」(本心)であることが多く、それゆえ、決して酒の上での「たわごと」(全く根拠のない言動)などではないのである。

つまり、もともとそういうことを言ったり、やったりする性質(性格)を潜在的に持っているからこそ、酒などを飲んで、その人の「知性や理性」などのコントロールが弱まった時には、そういうことを言ったり、やったりするという「言動」が、そのまま外に現われやすくなるということであり、それゆえ、これからは気を付けます、といくら平謝りに謝ったとしても、結局は、同じようなことをくり返すことになるのである。

*

*

米中戦争とは何か

米中戦争とは何か

例えば、昔、米ソの対立があり、その結果、なぜ「ソ連側」は負けたのか？ それは、経済力がなかったからである。ところが、現在、中国は、共産国（社会主義国）でありながら、アメリカに次ぐ巨大な「経済力」を手に入れたのである。これは、人類史上、初めてのことである。

そして、このままで行けば、やがてはアメリカを抜いて、世界第一の「経済大国」になつていくかも知れない。それは、単なる「経済大国」だけではなく、実は政治的にも軍事的にも「巨大国家」へと変貌していくのである。

例えば、昔、古代ローマ帝国時代、「……すべての道は、ローマに通ず」という諺（こゝろわざ）があったが、今や、「……すべての道は北京に通ず」というような、まさに巨大な共産主義国の「中華帝国」が誕生するかも知れないのである。それこそは、中国の壮大な国家プロジェクトでもある「一带一路」の実体である。

そして、今や、アフリカ諸国をはじめ、東南アジア、韓国、北朝鮮、台湾、その他、次から次へとオセロの色が変わる様に「中国色」へと染まっていく可能性が高い。あとは、米国と欧州であるが、欧州も経済援助などで「中国色」に染まる可能性はあるのである。

さて、今や、中国とアメリカとで本格的な「貿易戦争」が始まっているが、しかし、これは、単なる「経済戦争」などではなく、むしろ世界が「アメリカ側（自由主義国側）」になるのか、それとも、中国側（社会主義国側）になるのかの、まさに「一大決戦」の場でもあるのである。

*

*

種族保存欲

種族保存欲について

例えば、この地球上のありとあらゆる動植物は、何よりも「子孫を残す」ことを最優先させている。もちろん、「個体維持」も大事なことではあるが、それ以上に最優先させているものは、まさに「子孫を残す」ことであり、しかも、より強い「子孫」を残すような「仕組み」になっている。——例えば、動物界では、オス同士が闘い、必ず、勝ったオスとメスが交尾をして、より強い「子孫」を残すような「大原則」ができています。また、サケなども広い海から生まれ故郷の川へと遡上して、より強い「子孫」を残すような「仕組み」になっている。また、鳥たちの渡りの理由も、一つは、エサのためと、もう一つは、繁殖のためであるが、渡りをするためには、どうしても強い生命力が必要であり、また、鳥の「求愛行動」なども、結局は、生命力の「力強さ」が要求されるものであり、すべては強い「子孫」を残すための「仕組み」であり、そして、そのような「仕組み」を創り出しているものこそは、まさに「遺伝子」ということである。

一方、われわれ人間は、何よりも「自分が大事」であるという意識を持ち合わせているかと思うが、それでも、例えば、親たちは、自分の「子供や孫たち」のためなら、自分を犠牲にしてもよいという意識が自然と生じてくるということである。それは、一見、われわれ人間の「理知的部分」（知性や理性など）がそう考えて行動しているように思えるが、実はそうではなく、本当のことを言えば、われわれ人間をも含めたこの地球上のありとあらゆる「生命体」は、いわゆる子孫を残すことを何よりも最優先させるような「遺伝子の働き」を根底から受けているということである。それは、この地球上に生命が誕生したのは、約四十億年ぐらい前であるが、その生命が様々な進化を遂げながら今日まで永々と生き長らえて、今日でもなお地球上にこれほどまでの「生命体」が生存し続けている。「最大の理由」は何かと敢えて問えば、それは、われわれ人間を含めたこの地球上のありとあらゆる「生命体」は、まさに子孫を残すことを何よりも最優先させるような「遺伝子の働き」を根底から受け続けているからである。そして、それは、そのまま自分の「遺伝子」（子孫）をできるだけ多く残そうとしている「遺伝子自身の働き」に他ならず、それは、一般的には、いわゆる「本能」（今日的には「利己的遺伝子」と呼ばれているものである）。

例えば、動物たちは、ことさらに交尾そのものがしたくて交尾をしているというよりは、むしろ遺伝子（本能）から「交尾をしるとつき動かされて交尾をしている」ということである。また、われわれ人間も、自分の意志であれこれセックスしているように思いがちであるが、もちろん、そういう一面は確かにあるが、しかし、自分自身にも自覚できない最も根源的には、むしろ絶えず遺伝子（本能）からセックスをしるセックスをしるとつき動かされてセックスをしているということである。それは、例えば、異性への性的な「興味や関心」などは、死ぬまで途絶えることはなく、また、異性のちよつとした性的な「姿や仕草（言動）」などにも、すぐに「性衝動」が生じるような「仕組み」が、すでにでき上がっているということである。——つまり、動物の場合であれば、繁殖期が来れば、必ず本能的（衝動的）に「繁殖行動」へと向かっていくものであるが、一方、人間の場合には、動物ほど直接的ではなく、いわゆる「性衝動」がはつきりと生じることによってこそ、初めて「セックスができる」という「仕組み」（大脳辺縁系）になっていて、逆に、「性衝動」が生じなければ、セックスはできないということである。それをもっと具体的に言えば、

特に男性の場合、何らかの「性的刺激」を受けることによって、初めて「性欲」が生じるとともに、そのはつきりとした「性欲」（勃起）によってこそ、初めて、セックスが「可能になる」ということである。そして、そのような「性欲」を生じせしめているものは、もちろん、「仕組み」としては「大脳辺縁系」であるが、しかし、そのような「仕組み」を創り出したのは、まさに「遺伝子の働き」であり、「性欲」（「性衝動」）そのものは、そのまま「本能」（つまり「遺伝子の働き」）に他ならないのである。

つまり、われわれ人間が「セックス」をするのは、自分の「理知的部分」の働きで行なっていると思っている人は非常に多いかと思うが、むしろ、そういう一面は確かにあるが、しかし、われわれ人間の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）は、あれこれ「セックスのことを考える」ことはでき得ても、もともと「性衝動」そのものはないのであり、それゆえ、われわれ人間の「理知的部分」の働きだけでは、セックスはでき得ず、それにはつきりとした「性衝動」が加わることによって、初めて「セックスが可能になる」とともに、そのような「仕組み」を創り出しているのは、まさに「遺伝子の働き」であるということである。——それでは、なぜ、われわれ人間は、ほかの動物たちとは違って、そのような「仕組み」になっているのかと問えば、それは、もともとからあった「古い皮質」（つまり「大脳辺縁系」≪食欲や性欲その他の本能を生み出している部分≫）に加えて、動物から人間への進化の過程で、いわゆる「新しい皮質」（特に「前頭前野」≪いわば「理知的部分」≫）が覆いかぶさるようになり、大きく発達することによって、いわゆる「本能」をある程度コントロールでき得るような「仕組み」となり、その結果として、われわれ人間にとっても、もちろん、「食欲」や「性欲」という、この「二大本能」は、ほかの動物たちと全く同じように、最も「根源的なもの」であることに変わりはないが、その一方で、われわれ人間というのは、「新しい皮質」（特に「前頭前野」≪いわば「理知的部分」≫）の著しい発達によって、今日のようなかなり高度な「文化や文明」などを築き上げることを可能にして来たということでもあるのである。

*

*

子も孫も

可愛く見せる

遺伝子か

欲と情

欲と情

例えば、われわれ人間は、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされているものであるが、そのなかの「欲」としては、例えば、「……食欲、性欲、物欲、金銭欲、所有欲、支配欲、独占欲、出世（社会的地位）欲、名誉欲、名声欲、その他」、実に様々なものがあるかと思う。それでは、その「欲」というのは、一体、何なのかと問えば、それは、大きく二つに分かれ、一つは、生きていく上で、どうしても「必要不可欠なもの」として欲するようなものである場合と、もう一つは、いわば「蓄えや豊かさ或いは楽しみ、その他」のために欲するような場合とがあるかと思う。そして、最初の生きていく上でどうしても「必要不可欠なもの」として欲するようなものは、まさに「生きてはいけない」ということであり、それゆえ、その「欲」というものは、まさに「個体維持」（つまり「生存欲」）から生じて来る「欲求」ということになるかと思う。

例えば、動物たちの「欲」（欲求）というのは、基本的には、すべて「個体維持」と「子孫保存欲」から生じて来るものであり、それゆえ、われわれ人間のように「蓄えや豊かさ或いは楽しみ、その他」のために欲するというような場合は、たとえあつたとしても、それは、極めて「限られたもの」になるということである。一方、われわれ人間というのは、もちろん、同じ「動物」であるので、ほかの動物たちとまったく同じように、いわゆる「個体維持」と「子孫保存欲」という「二大本能」は、当然のことながら、しっかりと持ち合わせているわけだが、それに加えて、「蓄えや豊かさ或いは楽しみ、その他」のために「欲する」というような場合も、また、しっかりとあるということである。そして、前者が、「第一欲求」としての「動物的欲求」であるとすれば、後者は、「人間的欲求」としての、いわば「第二欲求」以上ということになるかと思う。

一、欲

それでは、「欲」の問題というのは、一体、何が「問題」なのかと問えば、それは、次のようなことである。例えば、お金がほしいと思う。それ自体には、何の問題もない。また、巨万の富がほしいと思う。それ自体にも、何の問題もない。それでは、一体、何が「問題」なのかと問えば、それは、その「お金」を手に入れる「手段の方法」にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。それは、一体、どういうことかと言えば、それは、お金を「正当な手段で手に入れた場合」には、ふつう問題はなく、逆に、お金を「不正な手段で手に入れた場合」にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。同じように、例えば、「性欲」を満たしたいと思う。それ自体には、何の問題もない。また、できるだけ数多くの異性と「恋愛体験」を持ちたいと思う。それ自体にも、ふつう問題は無い。それでは、一体、何が「問題」なのかと問えば、それは、「性欲」を「正当な手段」（例えば同意その他）で満たす場合には、ふつうであれば、問題はなく、逆に、「性欲」を「不正な手段」（例えば強制その他）などで満たそうとする場合にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。

つまり、「欲」から生じる「悪」の問題というのは、結局は、様々な「欲」を満たす時のその「手段の方法」によって、様々な「問題」が生じて来るということである。つまり、

それがたとえどのような「欲」であっても、いわゆる「正当な手段で手に入れた場合」であれば、基本的には、これという「問題」はなく、逆に、いわゆる「不正な手段で手に入れた場合」にこそ、様々な「問題」が生じて来るということである。そして、その「不正な手段」（或いは「不正な行為」としては、大きく「三つぐらい」に分類でき、その一つは、いわゆる「法」（法律）などに触れるような「不正的な行為」であり、そのような「不正的な行為」に対しては、何らかの「罰則」（例えば「刑罰」）などが課せられることになる。一つは、何らかの「組織や団体」（例えば、会社、学校、その他）などに所属している、その「組織や団体」（例えば、会社、学校、その他）などの「規則」その他に明らかに反するような「不正的な行為」をした時に、その「組織や団体」などから、何らかの「罰則」その他を受けるような場合であり、そして、もう一つは、いわゆる「慣習的規範」（例えば、冠婚葬祭、その他のマナー）などに明らかに反するような言動、あるいは、われわれ人間の「道徳観・倫理観」などに明らかに反するような「不正的な行為」などに対しては、何らかの「批判や非難」などを浴びることになるということである。

二、欲そのもの

それでは、「欲」そのもの、というのは、一体、どういうものであるかと問えば、それは、まさに「むさぼる」ということであり、その「むさぼる」というのは、何がなんでも手に入れたらという「欲求」でもあり、それゆえ、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、様々な「不正的な行為」が生じやすくなるということである。例えば、お金が欲しいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「お金」を手に入れたらという「欲求」が強くなり過ぎると、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、まさに「……強盗、窃盗、詐欺、恐喝、ひったくり、万引、その他」などが生じやすくなるということである。また、「性欲」を満たしたいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「性欲」を満たしたいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「性欲」を満たしたいという「欲求」が強くなり過ぎると、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、まさに「……痴漢、強制わいせつ、強姦（輪姦）、子供への性的虐待、その他」などが生じやすくなるということである。また、権力や社会的地位などがほしいと思う。それ自体には、何の問題もないが、何がなんでも「権力や社会的地位」などを得ようとする「欲求」が強くなり過ぎると、まさに「いかなる手段も辞さない」ということにもなりやすく、そこからこそ、まさに「実に様々な策略や陰謀あるいは卑劣な行為」その他などが生じやすくなるということである。

三、情

一方、「情」としては、例えば、「快・不快、怒り、恐れ、嫌悪、嫉妬、驚き、喜怒哀楽、愛情、苦しみ、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」、実に様々なものがあるかと思うが、それでは、「情」の問題としては、一体、何が「問題」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、上述のような「情（感情）」（特に「^{マイナス}の感情」）などに振りまわされて、自分自身を見失うようなところに、様々な「問題」が生じて来ると

いうことである。例えば、ある人に「恨みの感情」を抱いたとする。それ自体には、何の問題もない。なぜならば、その人が「頭の中」(或いは「心の中」)で何を思い、どのような「感情」を抱こうが、それは、その人の全くの「自由」だからである。ただ、「問題」なのは、その「恨みの感情」にかられて、何らかの「不正的な行為」を實際に行なうところに、様々な「問題」が生じて来るということである。そして、その最悪の「ケース」としては、例えば、相手に様々な「暴力」(暴行)などを振ったり、或いは、相手を殺傷したりして、いわゆる「犯罪的な行為」にまでなってしまうということである。

四、結び

つまり、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)では、実に様々な生々しい「欲望や感情」などが絶えず現われたり消えたりしている状態であるが、もちろん、それがそのままに現われるのではなく、ふつうであれば、その人の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)によって自然とコントロールされて、いわば「人間らしい言動」になって外に現われて来るということである。逆に言えば、その人の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)による「支配」(コントロール)が弱まれば弱まるほど、それだけその人の生々しい「欲望や感情」などは、そのままに現われやすくなるということである。それは、とくに酒に酔っているような時には、そのような傾向がより強くなるかと思うが、それは、言うまでもなく、その人の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)による「支配」(コントロール)が弱まり、それに代わって、その人の「欲望的部分」や「気概(激情)的部分」などが、その生々しい「鎌首^{かまくび}」を持ち上げるようになるからである。

つまり、われわれ人間というのは、ふだんは「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)によって強く支配されていて、様々な「欲望や感情」などは、それなりにコントロールされている状態であるが、何か問題を起こすその瞬間は、その人の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)による支配よりも、その時の「欲望や感情」などのほうが勝^{まさ}つてしまい、結果として、様々な「問題」を起こしてしまうということがある。逆に言えば、その人の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)によってしっかりとコントロールされていけば、様々な「不正的な行為」は、それだけ起こりにくくなるということである。それゆえ、様々な生々しい「欲望や感情」などに振りまわされているような時こそは、まさにありとあらゆる「不正的な行為」などが生じやすくなる、まさに「源泉」そのものになるということである。

*

*

よき伴侶（ベターハーフ）

よき伴侶（ベターハーフ）

例えば、われわれ人間というのは、基本的には、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）をいつも愛し求めてやまないものであるが、しかし、現実には、そのような「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）とめぐり逢い、そして、つき合ったり、結婚するというようなことは、なかなかできにくいものであり、それゆえ、多くの場合、理想の相手ではないが、それでもより「よき相手」（つまり「ベターハーフ」）とめぐり逢い、そして、つき合ったり、結婚するというのが、ふつう一般的なことになるかと思う。

つまり、「最良の伴侶」（つまり「ベストハーフ」）というのは、誰もが自分の「心の中」で絶えず愛し求めてやまない、まさに「理想の相手」ではあるが、それは、例えば、芸能界のなかでも特に誰々に強く心惹かれて、もう夢中になっているというようなことは、あの意味では、そこに「理想の相手」を見ていることになるのかも知れない。それに比べて、もう一方の、いわゆる「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）というのは、むしろ「現実の相手」ということになり、それは、例えば、現実のなかでめぐり逢う実に数多くの異性のなかでも、特に心惹かれるような異性にめぐり逢った時に、できれば、その相手の異性とつき合いたいと思うようになり、それが、うまくいき、つき合うようになれば、それが、現時点でのいわば「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）になるかと思うが、しかし、相手との関係がうまくいかなくなれば、今度は、別れるということになり、また、新しい相手を探し求めることになるかと思うが、それは、どのようなことを意味するのかと言えば、それは、まさにより「よき相手」を新たに探し求めるということである。

そして、そのより「よき相手」を探し求めるというのは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、結局、その人の「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）にめぐり逢いたいという欲求に他ならないわけだが、しかし、そのような相手を見つけ出すことは、現実にはなかなか難しいことであり、それゆえ、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）により近い相手にめぐり逢いたいと、知らず識らずのうちに、探し求めていることになるのである。——つまり、誰もが自分の「心の中」で絶えず探し求めてやまないものは、まさに「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）ではあるが、しかし、現実にはなかなかそのような相手とめぐり逢うことはできにくく、それゆえ、その時、その時にめぐり逢ったより「よき相手」とつき合うことになるが、それが、いわば現時点での「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）になるということである。

それでは、そのような「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）に100%心の底からすべて満足でき得ているものだろうか？ それは、極めて難しい問題であり、たとえ現時点では満足でき得ても、やがては不満が生じて来るとすれば、その「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）も、結局は、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）ではなかったということになり、それゆえ、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）にめぐり逢えるまでは、その人の「恋」という旅路は、なおも続くことになることである。——つまり、われわれ人間の「心」というのは、最終的には、身も心もすべてびたつと一つに溶け合えるような、まさに自分の「片割れ」（つまり「ベストハーフ」）そのものに遂にめぐり逢えたと思えるような時にこそ、われわれ人間の「心」というのは、心の底からの「満足感や幸せ感」などが得られることになるのだろう。なぜなら、それこ

それは、まさにわれわれ人間の「異性」を愛し求める「恋」^{エロス}という旅路の、いわゆる「最終地点」(或いは「最終目的」)にもなるからである。

良き伴侶

得てぞ知るや

良き人生

さて、ここで最大の「問題」となるのは、次のようなことである。つまり、プラトンの『饗宴』という著作のなかでアリストパネスという登場人物が、いわゆる「恋(エロス)」について非常に有名な話(演説)をする箇所があるが、そのなかで、最初は「二つの体」(男女)であったものが、神々に刃向かうようになったので、神の怒りにふれて、「二つの体」(つまり男と女)に引き離されてしまうということである。そうすると、今度は、自分の「半身(片割れ)」にぜひともめぐり逢いたいという極めて強い欲求に襲われるというのが、まさに「恋(エロス)」であるということである。そして、ここで最も大事なことは、相手がまさに自分の「半身(片割れ)」そのものであるならば、文字通り、その「相手」(つまり自分の半身《片割れ》)そのものとは、百%すべてありとあらゆるところまで「割り符」がびたつと一つになるような、まさに完全なる「一体感」がうそ偽りなくほんとうに得られることになるのだろう、それこそは、まさに「身も心もほんとうに一体感が完全なる形で味わえる相手」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)そのものである。——それゆえ、その「相手」(つまり自分の「半身《片割れ》」そのものを「ベター」(よりよき相手)と呼ぶことは、明らかに「間違」であり、その「相手」(つまり自分の「半身《片割れ》」そのものは、文字通り、まさに「ベスト」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)そのものであると呼ぶべきものである。

ところが、現実の世界においては、例えば、何から何までまったく別々の環境の中で生まれ育った男と女が、例えば、「割り符」がびたつと一つになるような、そういう「一体感」がほんとうに得られるかどうかと問われれば、それは、やはりなかなか難しいことになるかと思うが、しかし、われわれ人間の「心」というのは、やはりまさに「割り符」がびたつと一つになるような、そういう「身も心もほんとうに一体感が味わえる相手」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)にめぐり逢いたいというのが、まさにわれわれ人間の最も根底にある「恋心とその原動力(エロス)」になるかと思う。もちろん、現実には、そのような「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)とめぐり逢い、そして、その「理想の相手」とつき合ったり、結婚するということは、極めて難しいことであり、それゆえ、文字通りの「理想の相手」ではないが、それでもそれにより近い「よりよき相手」(つまり「ベターハーフ」)とめぐり逢い、そして、その相手とつき合ったり、結婚するというのが、ふつう一般的なことになるかと思う。——つまり、「最良の伴侶」(つまり「ベストハーフ」)というのは、誰もが自分の「心の中」で絶えず想い描いてやまない、まさに「理想の相手」そのものではあるが、現実には、そのような「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)を見い出すことは極めて難しいことであり、それゆえ、いわゆる「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)ではないが、その「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)により近い相手、つまり、まさに「よりよき相手」(つまり「ベターハーフ」)

とめぐり逢い、そして、その相手とつき合ったり、結婚するというのが、まさにわれわれ人間のあるがままの「現実の姿」(つまり「現実」そのもの)になることである。

それゆえ、今日、「ベターハーフ」という言葉は、いわゆる「プラトニック・ラブ」という「言葉」と同じように、本来とはかなり違った「意味合い」で使われることが多いかと思うが、しかし、本来は、いわゆる「理想の相手」(それはもともとは自分の「半身」(片割れ≒)そのもの)のことであったが、それとほとんど同等の相手を、まさに「ベストハーフ」と呼び、そして、そこまではいかない「現実の相手」を、まさに「ベターハーフ」と呼ぶのが、まさに「ベストハーフ」と「ベターハーフ」という言葉の「正しい使い方」になるかと思う。

*

*

ベターより

ベストが恋しい

恋心

情熱

情熱について

例えば、「情熱」というのは、われわれ人間の「知・情・意・生理（本能）、その他」、それらすべてをひっくるめて激しく燃え上がる「心的エネルギーの炎」であるが、それには、どちらかと言えば、「+」の方向に向かっていく、まさに「一般的情熱」と「意志的な情熱」とがあり、逆に、どちらかと言えば、「-」の方向に向かっていく、まさに「一般的情熱」と「意志的な情熱」とがあり、そして、その「-」の方向に向かうものは、それぞれ一般的な「-」の情熱」と意志的な「-」の情熱」とになるということである。

一、一般的な「情熱」

例えば、われわれ人間が積極的に「活動」（行動）するためには、どうしても「やる気、意欲、意気込み、その他」などの心的エネルギーの「高まり」が必要であり、その心的エネルギーの「高まり」が、まさに「情熱」となって、その人をして何らかの積極的な「活動」（行動）へとかりたてるものである。そのなかで、一般的な「情熱」というのは、われわれ人間がふつう一般的に燃やす「情熱」のことであり、それによって、まさに「仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他」などを積極的に行なうことができるということであるが、ただ、それは、その時々を生じては、やがては消えていくものであり、それゆえ、いわゆる「意志的な情熱」のように比較的長い期間にわたって持続するようなものとは、根本的に違うものである。

一方、一般的な「-」の情熱」というのは、その時々様々な「欲望や感情」などに振りまわされて、例えば、相手を「怒鳴ったり、殴ったり、いじめたり、からかったり、脅おどしたり、また、万引きや放火、或いは、わいせつ的な行為などをしたり、あるいは動植物や物などを故意に傷つけたり、こわしたり、その他」、他人やその他の対象などに迷惑をかけたなり、また、何か「不正的なこと」をあれこれ面白がって行なうような「情熱」であり、そのように、どちらかと言えば、-の方向に向かって積極的に行動していくものである。ただ、意志的な「-」の情熱」のような「計画性」は、それほどはなく、その時々「欲望や感情」などに振りまわされた「行動」（言動）であることが、多いということである。

二、意志的な「情熱」

次に、「意志的な情熱」であるが、それは、何かをやり遂げようとする意志的な「心の働き」であり、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療（保健）、また、農業、林業、漁業、水産養殖業、鉱業、建設業、製造業（工業）、卸売・小売業、金融・保険業、運輸・通信業、不動産業、電気・ガス・水道・熱供給業、サービス業、公務、その他、何であれ、なにか「より生産的な、より建設的な、より創造的な」方向に向かって、あるいは、何か真に価値ある、何か真に意義ある、あるいは何か真に優れた「発明、発見、創造、業績、行動、その他」などが生み出されるような方向に向かって、その人の内心で持続的に燃え続ける意志的な「心の熱情」である。そして、何かをやり遂げるためには、どうしても長い時間と忍耐とたゆまぬ努力と持続的なエネルギー

とが必要不可欠になって来るかと思うが、それらを支えるのが、まさに意志的な「情熱」ということになるということである。

それでは、その意志的な「十の情熱」は、いったいどこから供給されるのだろうか。それはもちろん、その人の「知・情・意・生理（本能）、その他」、それらすべてをひっきりめて激しく燃え上がる「心的エネルギーの炎」からであるが、より深い「供給源」としては、われわれ人間の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」から成る）が成熟して、その人の最も奥深いところで太陽のごとく生き生きと躍動している「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からであり、それは、その人をして何らかの社会的な活動へとかり立てる傾向があり、その結果、時には何か真に価値ある、何か真に意義ある、あるいは何か真に優れた「発明、発見、創造、業績、行動、その他」などを生み出させることにもなるということである。そのように十の意志的な「情熱」というのは、まさに「より生産的な、より建設的な、より創造的な」方向に向かって、持続的に燃え続ける心的エネルギーの「炎」（つまり「熱情」ということである）。

一方、意志的な「一の情熱」であるが、それは、何かをやり遂げようとする意志的な「心の働き」ではあるが、その方向が「十の情熱」とは違って、まさに「より破壊的な、より破滅的な、より退廃的な」方向へと向かっていくものであり、その最大のもの、いわゆる「戦争」になるかと思うが、その次に来るものとして、様々な「犯罪的な行為」があり、例えば、計画的な「殺人、強盗、窃盗、傷害（暴行）、誘拐、汚職（贈収賄）、詐欺、恐喝、密輸、横領、放火、万引、わいせつ行為、強姦、薬物乱用、テロ活動、その他」、その人の向かっていく方向が、どちらかと言えば、一の方向に向かっていく「情熱」である。

ただ、人によっては、国や国民を守るための「戦争」であれば、それは、「一の情熱」ではなく、むしろ「十の情熱」ではないかと反論する人も多いかと思う。もちろん、国や国民を守ろうとすることは、「十の情熱」であることに間違いはないが、ただ、「戦争」そのものは、どのような「大義名分」のもとで行なわれようとも、いわゆる「人殺しと破壊活動」であるしかなく、その「行為」自体は、一の方向に向かっていくものである。つまり、国や国民を守ろうとする「十の情熱」と、そうするためには、どうしても「人殺しや破壊活動」をしなければならぬという「一の行為」が不可避であるところに、「戦争」というものの最大の「悲劇性」があるのであり、たとえその「戦争」に勝っても負けても、極めて悲惨な傷跡を残すことになるということである。それゆえ、「戦争」という最悪の事態にならないように、日頃から国際関係の「友好や交流」などをはかる努力を永続的に続けることこそは、まさに「十の情熱」ということになるということである。

*

*

情熱とは、

人心の地下で燃え滾る

熱き岩漿かな

成長
(脱皮)

成長（脱皮）について

例えば、自分というものを本当の意味で、真に「成長」させたいと「心の底」からそう願うならば、その「方法」は、一つしかない。それは、自分の「限界」で燃え尽きることである。ほかに「方法」はない。そして、その燃え尽きた「灰の中」から、新たな「生命」を授かり、再び、甦よみがえって来る。それは、まさに「不死鳥」がそうであるように……。そして、そのようなことを何度も何度も繰り返すことによって、自分の「小さな殻」を何度も何度もうち破りながら、より「大きな自分」へと何度も何度も脱皮し続けなければならぬ。なぜなら、それこそは、まさに真の「成長」にほかならないからである。そして、その自分の「小さな殻」をうち破るためには、自分の「全身全霊」を傾け尽くして、自分の「限界」で何度も燃え尽きなければならぬ。なぜなら、自分の「限界」で何度も燃え尽きることによってこそ、初めて、自分の「小さな殻」（「限界の壁」）が破れることになるからである。逆に言えば、自分の「全身全霊」を傾け尽くして、自分の「限界」で燃え尽きない人たちには、真の「成長」は、望めない。なぜなら、自分の「限界」で何度も燃え尽きるからこそ、やがて、自分の「小さな殻」（「限界の壁」）も破れて、まさに新しい「自分」へと脱皮でき得るからである。それゆえ、いつも「自分の力の範囲内」で、まさに「行動（言動）」している人たちには、真の「成長」は、望めない。なぜなら、自分の「全身全霊」を傾け尽くして、自分の「限界」で燃え尽きない限り、その人の「小さな殻」（「限界の壁」）は、いつまで経っても破れることがないとともに、自分の「小さな殻」（「限界の壁」）が破れない限り、その人は、真に新しい「自分」へと脱皮できないからである。

例えば、スポーツなどであれば、幼児期をはじめ、小・中・高校、そして、大学と、自分の「全力」を尽くして、その「競技」に何年も真剣に取り組むようにすれば、その人は、順調に「成長」していくことになるが、しかし、大事なものは、その次の「段階」からである。つまり、まだ「伸びしろ」のある段階では、その人は、努力をすれば、その努力した分だけ、確実に「成長」していく可能性が高いが、しかし、やがて、いくら「努力」をしても、思うように「成長」できないという「壁」にぶつかることになる。そして、その「壁」こそは、まさにその人の最初の「大きな壁」であるとともに、その「大きな壁」を突破する「方法」こそは、まさに自分の「限界」で燃え尽きるという「方法」なのである。つまり、自分の「全身全霊」を傾け尽くして、自分の「限界」で燃え尽きるということを、何度も何度も繰り返すしかない。もちろん、それは、でたらめにそうするのではなく、可能な限り、ありとあらゆる専門的な「知識や技術」などを総動員して、そのようなことを行なうということである。そして、自分の「全力」を尽くして、自分の「限界」で何度も何度も燃え尽きることによってこそ、やがて、自分の大きな「限界の壁」が、遂には破れることにもなるということである。

もちろん、それは、何もスポーツに限ったことではなく、ありとあらゆる「分野・領域」について言えることであり、例えば、「学問」の世界でも、幼児期をはじめ、小・中・高校、そして、大学と、自分の「全力」を尽くして、その「勉学」に何年も真剣に取り組むようにすれば、その人は、順調に「成長」していくことになるかと思うが、しかし、やがて、いくら「努力」をしても、思うように「成長」できないという「壁」にぶつかることになる。そして、その「壁」こそは、まさにその人の学問上の「大きな壁」であるとともに、

その「大きな壁」を突破する「方法」こそは、まさに自分の「限界」で燃え尽きるという「方法」なのである。——つまり、自分の「全身全霊」を傾け尽くして、自分の「限界」で燃え尽きるということを、何度も何度も繰り返し返すしかない。例えば、将棋や囲碁などでも、自分よりも「弱い相手」と何度対戦して勝っても、自分の「成長」には何らの意味も持たない。大事なのは、自分よりも「強い相手」と全力で戦って負けてこそ、初めて、自分の今の「実力」（「限界の壁」）を知るのである。そのようなことを何度も何度も繰り返し返すことによってこそ、知らず識らずのうちに、その人も、真に「成長」でき得るのである。それと全く同じように、「学問の世界」でも、自分の「能力」の範囲内で解けるような「問題」をいくら解いても、自分の「能力」を真に育てることはならない。大事なのは、自分の「能力」では、とても解けそうもない極めて難しい「問題」にも、敢えてどんどん挑戦することによってこそ、初めて、自分の能力の「限界」で燃え尽きるということを、まさに「身を以って知る」（実感する）ことになるとともに、可能な限り、ありとあらゆる専門的な「知識や技術」などを総動員して、その難しい「問題」に挑戦し、その結果、解けても、解けなくても、次の難しい「問題」へと、次から次へと、自らに「難題」を課していくということである。なぜなら、そのようなことを何度も何度も繰り返し返すことによってこそ、自分の「小さな殻」（「限界の壁」）を何度も何度もうち破ることができ得るとともに、より「大きな自分」へと何度も何度も脱皮し続けることが、初めて可能になるからである。

*

*

次から次

殻脱ぎ捨てる

成長、かな

知性と理性

知性と理性について

例えば、一般に、いわゆる「知性」や「理性」という言葉は、その時代やそれを使う「人たち」(特に「哲学者」たち)によって、実に様々な「意味合い」で使われて来たものであるが、ここでは、次のような「意味合い」で使われているということをはっきりと定義をして、様々な「誤解」のないようにしておきたいと思う。

まず、「知性」という言葉であるが、この「言葉」は、いわゆる「知的な働き」のすべてを網羅するものであり、それゆえ、われわれ人間の誰もが行なっている「ものを考えた」、理解したり、判断したり、想像したり、予測したり、その他」の「知的な働き」すべては、まさに「知性」(或いは「知性的部分」)の働きであるということである。しかも、「知性」(或いは「知性的部分」)というのは、「善いこと」だけではなく、どんなに「悪いこと」(例えば「極悪非道」なこと)を考える時にも、必ず、「知性」(或いは「知性的部分」)を使って考える(この時、「理性」を使って考えるという使用法はない)ことになる。つまり、「知性」(或いは「知性的部分」)というのは、物事の「真偽、善悪、美醜、価値、聖俗、その他」などとられられず、ありとあらゆる「考え、意見、判断、想像、予測、その他」などを行なっている、まさに「知的な働き」すべてを網羅するものである。

一方、われわれ人間というのは、一般的に、いわゆる「偽」よりは、「真」に価値をおき、「悪」よりは、「善」に価値をおき、「醜」よりは、「美」に価値をおき、そして、「俗」よりは、「聖」に価値をおくというような、「傾向」(特徴)がはっきりとあるかと思う。それでは、そのような「思考や判断」は、一体、何が行なっているのかと問えば、それはもちろん、「知性」(或いは「知性的部分」)も当然行なっているのかとそれとともに、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なっているのは、われわれ人間の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」から成る)のなかでも、いわゆる「理性」(或いは「理性的部分」)であるというのが、ここでの「理性」(或いは「理性的部分」)という言葉の「使い方」であり、また、「理性」(或いは「理性的部分」)という言葉の「意味合い」になるということである。

例えば、「どんなうそをついても利益を上げたい」と思うのは、「欲」と結びついた「知性」(或いは「知性的部分」)の働きであり、一方、「利益のためにそんなうそをつくのはよくない」と言うのは、むしろ「理性」(或いは「理性的部分」)のほうである。また、「目的を達成するためにはどんなあくどい手段をも辞さない」と考えるのは、「欲望や野心」と結びついた「知性」(或いは「知性的部分」)のほうであり、一方、「目的のためにそんなあくどい手段を使うのはよくない」と言うのは、むしろ「理性」(或いは「理性的部分」)のほうである。また、「どんな服装や髪型にしよう」と個人の自由である」と考えるのが、いわゆる「知性」(或いは「知性的部分」)であり、一方、「その場にふさわしい服装や髪型にしたほうがよい」と言うのは、むしろ「理性」(或いは「理性的部分」)のほうである。また、「人に迷惑をかけようが、人がどうなるかが、そんなことは知ったことではない。ましてや人のため、社会のため、あるいは様々な礼儀やマナーなどを心得る、そんなことはどうだっていい」と考えるのは、まさにその人の「エゴ」と結びついた「知性」(或いは「知性的部分」)のほうであり、一方、「人間としてそれにふさわしい行為(言動)をしたほうがよい」と言うのは、むしろ「理性」(或いは「理性的部分」)の

ほうになるということである。

そのように「知性」(或いは「知性的部分」)というのは、まさに「知的な働き」すべてを網羅するものであるのに対して、一方、一般に、いわゆる「偽」よりは、「真」に価値をおき、「悪」よりは、「善」に価値をおき、「醜」よりは、「美」に価値をおき、そして、「俗」よりは、「聖」に価値をおくという、そういう「思考や判断」をより厳密に行なっているのは、むしろ「理性」(或いは「理性的部分」)であるということである。つまり、「知性」(或いは「知性的部分」)からは、ありとあらゆる「考えや意見或いは予測、その他」などが出てくるが、その出てきたありとあらゆる「考えや意見或いは予測、その他」などの「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なっているのが、まさに「理性」(或いは「理性的部分」)であるという「考え方」になるということである。

つまり、われわれ人間の「理性的部分」というのは、いわゆる「知性+理性+母体のようなもの」からなり立っているものであるが、そのなかの「知性」(或いは「知性的部分」というのは、われわれ人間の、いわゆる「知的な働き」すべてを網羅するものであり、それゆえ、その「知性」(或いは「知性的部分」)からは、ありとあらゆる「考えや意見或いは予測、その他」などが出てくるわけである。一方、その出てきたありとあらゆる「考えや意見或いは予測、その他」などの「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なっているのが、まさに「理性」(或いは「理性的部分」)でも、当然のことながら、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等を行なっているが、それをより厳密に行なっているのが、まさに「理性」(或いは「理性的部分」)であるということである。それでは、もう一つの「母体のようなもの」というのは、一体、どのようなものになるのかと問われれば、それは、次のようなものになるということである。

* * *

まず最初に、われわれ人間の「理性的部分」というのは、本来であれば、いわゆる「知性+理性」からなり立つ、という説明だけで十分なはずであるが、それに「母体のようなもの」というものを敢えてつけ加えなければならなかったのは、なぜなのか？

それは、次のような幾つかの「理由」からどうしてもつけ加えなければならぬからである。まず、われわれ人間の「知性や理性」というのは、生まれた時(つまり「赤ちゃん」の時)は、まだこれという「確たるもの」ではなく、未だ「知性や理性」とは呼べないような状態のものである。つまり、まず最初は、知性とも理性とも呼べないようなすべてが渾然一体となっている状態であるが、やがて「知性や理性」などが生じて来る(つまり「知的部分」)へと成長していくことは、すなわち、やがて「知性や理性」などが生じて来る「大元」(つまり母体になるようなもの)がなければならぬ。その「大元」(つまり母体になるようなもの)こそは、まさに「母体のようなもの」であり、その「母体のようなもの」から、やがて「知性」(或いは「知性的部分」)と「理性」(或いは「理性的部分」)とが自然発生的に生じて、成長していくことになるということである。

つまり、われわれ人間というのは、いわゆる「母体のようなもの」をうちに宿してこの世に生まれて来る。そして、その「母体のようなもの」というのは、未だ「知性や理性とも呼べないような渾然一体となっている状態」ではあるが、その母体の内には、いわば「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」というものを宿していることになる。もしそうでな

ければ、われわれ人間というのは、そもそも「善」という意識を持つことすらできないだろう。——つまり、この地球上に何十億といる全人類のすべての人たちが、たった一人の例外なく、文字通り、一人一人すべての人たちが、いわゆる「善」という意識を持ち合わせているとすれば、それは、決して「後天的なもの」(つまり「生まれたあと身につけるようなもの」)では決してなく、それは、まさに「先天的なもの」、つまり、生まれながらに「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)というものをうちに宿して、この世に生まれて来るという、何よりも「絶対的証拠」となり得るものである。

やがて、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)から、自分自身でも自覚できる、いわゆる「知性」(或いは「知性的部分」と「理性」(或いは「理性的部分」)とが自然発生的に生じて、いわゆる「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)を形成するようになるが、その思惟主体である「知性+理性」に根底から働きかけ作用している「主体」(「源泉」)こそは、まさに「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)であるとともに、それは、逆に、まったく自覚できないものである。

また、その「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というのは、いわゆる「知性(理性)の光」の「源泉」でもあり、その「知性(理性)の光」がわれわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)で明るく燈^{とも}っているからこそ、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)には、「思惟界」が存在でき得るということにもなるのである。

さて、われわれ人間の「理知的部分」というのは、いわゆる「知性+理性+母体のようなもの」から成り立っていることになる。そして、実に様々なことを「思考(思索)」する「知的活動」を行なっている主体である「知性」(或いは「知性的部分」というのは、いわゆる「善悪」どちらにも手を貸すことができ得るものである。また、それとほとんど同時進行的に、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なっている「理性」(或いは「理性的部分」というのも、時には悪いとは知りつつも、様々な「欲望や感情」などに負けてしまう部分でもあるわけだ。ところが、いわゆる「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というのは、決して「悪」を欲しないし、また、「悪」とは断じて妥協できない。なぜなら、「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)を内に宿している「母体のようなもの」というのは、いわゆる「善」という意識が生まれ出づるまさに「源泉」そのものだからである。それゆえ、「悪」とはどこまでいっても妥協できないとともに、「善」だけを望んで、決して「悪」を欲しないものである。

そして、その「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)こそは、まさにわれわれ人間の「良心」そのものの「源泉」そのものでもあるということである。そして、われわれ人間の「良心」というものが、なぜ、自分の思い通りに少しもならず、その「良心の呵責」などに深く悩まされることになるのか? と敢えて問えば、それこそは、まさにわれわれ人間の「良心」とは、すなわち、先天的な「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)の働きに他ならないという、そういう「理由」によるのである。

*

*

それでは、いわゆる「思惟主体」である「知性+理性」というのは、具体的には、一体、どのように「ものを考えている」のかと問えば、それは、次のようになるかと思う。

まず、われわれ人間の「諸感覚」(つまり「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じる」こと)などを通じて、様々な「情報」が入って来る。その様々な「情報」などを基にして、まず、「知

性」(或いは「知性的部分」)では、あれこれ「もの」を考えたり、理解したり、判断したり、想像したり、予測したり、その他」などを行なうことになるが、それとほとんど同時進行的に、いわゆる「理性」(或いは「理性的部分」)では、そのあれこれ考えた内容の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なうことになる。もちろん、そこで終わるのではなく、再び、われわれ人間の「諸感覚」(つまり「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じる」こと)などを通じて入って来た、その新たな「情報」などを基にして、「知性」(或いは「知性的部分」)では、さらに、あれこれ「もの」を考えたり、理解したり、判断したり、想像したり、予測したり、その他」などを行なうことになり、それをまた、「理性」(或いは「理性的部分」)では、そのあれこれ考えた内容の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なうようなことを、何度も何度も繰り返し繰り返し行ないながら、その人の「考えや想い」などをより深めていくことになる。——つまり、もっと簡単に言えば、「知性」で考えて、「理性」で吟味する。また、「知性」で考えて、「理性」で吟味し、また、「知性」で考えて、「理性」で吟味するというようなことを、何度も何度も繰り返し繰り返し行ないながら、その人の「考えや想い」などをより深めていくことになるのである。

*

*

思考とは

知性で考えて

理性で吟味する

その繰り返しかな

人間の基本的な欲求

人間の基本的な欲求

例えば、われわれ人間の「基本的な欲求」というのは、すべての人間に共通したものであり、それゆえ、基本的には何も変わるところはないのである。それでは、一体、どこがどのように違うのかと問えば、それは、それぞれの「基本的な欲求」にどれだけこだわっているのか？ それが人によってそれぞれ違って来るだけである。——例えば、食事であれば、空腹を満たさなければ、やがては死んでしまうものであり、それゆえ、何かを食べなければならぬが、その場合、空腹を満たされれば、それでも十分という場合と、あとは、その「食べ物」というものにどこまでこだわることかという、そういう「問題」が残されているだけである。つまり、下は、生きるための必要最少限度の「食事」から、上は、世界中のありとあらゆる「料理」を食べ尽くそうという領域までのなかで、「自分は、一体、どこに位置するのか？」という、そういうことが、一人一人違うというだけである。

また、「性欲」（それは「愛情欲」「セックス欲」「子孫欲」などにしても、人間であれば、誰もが本来持ち合わせている「基本的な欲求」であり、それゆえ、あとは、その人が「性欲」（それは「愛情欲」「セックス欲」「子孫欲」というものにどこまでこだわっているのか？ それによって、その人の「異性との関係」（或いは「同性との関係」）も、それぞれ「違って来る」ということである。——例えば、どうしても「子供がほしい」と思えば、人工授精でも、養子でも、ほしいということになるだろうし、また、「愛情問題」についても、誰々が好きだという場合、どこまで好きなのか？ どこまでのこだわりを持っているのか？ 誰にどこまでの「愛情」を求め、また、誰にどこまでの「愛情」を降り注ぎたいのか？ そして、「セックス」に対しても、下は、全く興味を示さない（或いは拒絶反応を示す）ような場合から、上は、できるだけ世界中のありとあらゆる異性（或いは「同性」とありとあらゆるセックスをしたいという領域までのなかで、「自分は、一体、どこに位置するのか？」という、そういうことが、一人一人違うというだけである。

そして、「物欲」（金銭欲）にしても、基本的には、誰もが持ち合わせている「基本的な欲求」であり、あとは、どういうものにとどこまでこだわっているのか？ そういう「問題」があるだけであり、例えば、下は、生活するのに必要最少限度の「物欲」（金銭欲）だけで十分とする場合と、上は、この世にあるありとあらゆるものありとあらゆるものをできるだけ何でも手に入れたいという「物欲」（金銭欲）の領域までのなかで、「自分は、一体、どこに位置するのか？」という、そういうことが、一人一人違うというだけである。

それでは、これらは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、われわれ人間の「基本的な欲求」というのは、すべての人間に共通したものであり、それゆえ、基本的には何も変わるところはなく、この地点までは、人間というのは、すべて「同じ」であるということである。それでは、一体、どこからどのように違うのかと問えば、それは、それぞれの「基本的な欲求」の最低限度までは全く同じであるが、そのあとは、例えば、「食欲」、性欲、物欲、金銭欲、所有欲、独占欲、支配欲、出世（社会的地位）欲、名誉欲、名声欲、その他」、実に様々なものがあるかと思うが、それらにとどこまでこだわっているのか？ それぞれの「欲求」に対するこだわりの「強弱」こそは、まさに「自分は、一体、どこに位置するのか？」ということの「位置付け」であり、そういうことが、一人一人違うというだけに過ぎないのである。——それをもっと簡単に言えば、人間というのは、基本的には、

みな「同じ」であり、あとは、何にこだわっているのか？
* *
そこが「違う」だけである。

最後に辿りつく地点

最後に辿りつく地点

例えば、世界中のありとあらゆる「料理」を食べ尽くした人が、最後に辿りつく地点とは、一体、どのような地点かと問えば、それは、結局、「……お茶漬けやにぎり飯などでもう十分」ということになるのだろう。それは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、結局、人間、生きていく上で、何もことさらに「美味しい料理」である必要もなく、ごく一般的に、美味しい「料理」であれば、それでもう十分ということである。

また、例えば、世界中のありとあらゆる「国々」を旅し尽くした人が、最後に辿りつく地点とは、一体、どのような地点かと問えば、それは、結局、「……わが家がいちばん」ということになるのだろう。それは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、結局、われわれ人間にとつて、最も「安心できる所」、最も「心が安らぐ所」、そして、最も「心の落ち着く所」、それは、結局、「わが家」であるということである。

また、例えば、世界中のありとあらゆる「女性たち」と恋愛をし尽くした人が、最後に辿りつく地点とは、一体、どのような地点かと問えば、それは、結局、「……同じ事の繰り返しに過ぎず、身も心を真ほんとうに深く溶け合える相手こそは、まさに理想ベストである」ということになるのだろう。——また、例えば、世界中にある眼も眩くらむばかりの「衣装や品物或いは豪邸」などを手に入れて、そこに住み、それらで身を華はなやかに飾り立てても、それらは、すべて「自分の外そと」に存在するものであり、それゆえ、それらによって、まさに自身まが真に「優れた存在」になるわけではなく、また、「社会的地位や名誉或いは又名声」なども、結局は、みな同じことであり、それらは、すべて「社会的な衣装」に過ぎず、それらの「社会的な衣装」がどれほど豪華な「社会的な衣装」であろうとも、それらを身に纏まとっているその人「自身」と、その豪華な「社会的な衣装」とは、もともと「別々のもの」であり、それゆえ、それらの様々な「社会的な衣装」などをすべて脱ぎ捨てても、なお、その人「自身」が、どれだけ人間として真に魅力的に「内的成長（成熟）」しているのかが、まさにその人の人間としての真の「評価」になるのである。

*

*

死に場所

死に場所について

例えば、『葉隠』という著作のなかには、「……武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」という、あまりにも有名な「言葉」があるが、この「言葉」を敢えて現代風にアレンジして考えてみると、それは、次のようになるかと思う。

まず、われわれ人間というのは、やがては死んでいく宿命さだめであり、何人たりともそれから逃れることはでき得ない。それゆえ、あとは、どのように生きていたらよいか「最大の問題」になるかと思うが、その場合、その人が生きたいように生きれば、もちろん、それでよいわけだが、それとともに、何をもちて自分の人生とするのか？ その「死に場所」を見つるということでもあるのだろう。それは、「……ここで死ぬなら本望と思えるようなところで、全力を尽くして頑張る」ということであり、そこにこそ、いわゆる「生きがい」ややりがい或いは充実感」などを見つけ出すことができるとともに、できれば、それを「仕事」（社会的な活動）として、また、「生活」（家族的な生活）なども充実させたり、さらには「遊び」（趣味や娯楽やレジャーなど）を充実させることによって、まさに「三つの充実」が達成されることにもなるということである。

そして、理想を言えば、心身ともに、自分を常に「ベストの状態」においておくこと。そうすれば、どのような事態に臨んでも、いつでもベストの状態に対応でき得るようになるからである。また、われわれ人間にとっていちばん幸せなことは、自分の精神も肉体もほんとうに充実していることであり、人間にとってこれ以上に幸せなことはないのである。それは、いわゆる「自己管理」によって達成可能であるとともに、もう一つ、われわれ人間を支えているのは、まさに「精神」であり、従って、自分の「精神」（つまり気持ち）がふらふらしていたのでは、何も始まらないのであり、それゆえ、自分の「精神」をしつかりとさせる必要がある、そして、自分の「精神」をしつかりさせるとは、すなわち、自分の「精神」を自立させるということである。つまり、大事なことは、いわゆる「精神の自立」であり、それは、真に「内的成長（成熟）」することによってこそ、初めて、まさに「……自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の間になる」ということである。そして、われわれ人間にとってのほんとうの「幸せ」というのは、この世の実に様々な「物質的なもの」などに恵まれるというようなことではなく、むしろ自分の「心魂たましい」そのものが、うそ偽りなく、ほんとうに深く満たされているかどうかというところにこそ、まさに「存在する」ということである。

*

*

死に場所や

ここで死ぬなら

本望と